オーバーロード～悪魔な天使～

通商路の要衝

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

オーバーロードの二次創作です。

ＦＣ２小説で書いているオリジナル作品「ハルマゲドン～Ｉｎｖｉｔａｔｉｏｎ　ｔｏ　ｒｕｉｎ～　始」からキャラ設定など若干流用して使ってます。

タグなど、なにかしら抜けてるなーと気付いたら徐々に増やしていってます。

約４年ぶりの新規執筆という大ブランクがありますが、執筆意欲を掻き立ててくださったオーバーロードに感謝。

あくまでブランク解消、執筆の感覚取り戻しと趣味の範囲になるので遊び心を入れた

文章にしていく予定。
戦闘描写などは少なめです。
原作のような見事な「すれ違い」も表現したいので、わざとらしい表現・ドストレートに信用する表現にご注意。
お話的には、すぐにはアインズ・ウール・ゴウンとの接触はなく、完全に独創になるのでご了承ください。
なお、プロローグがキャラ設定、あらすじとなります。
何話か進めたら、一応詳細をまとめた話を差そうかなと考え中。

目次

000．プロローグ ―― 1
001．小悪魔な天使 ―― 42
002．魔神な天使 ―― 62

０００．プロローグ

鬱蒼と生い茂る木々が、すすり泣くように身を寄せ合う。
空を、大地を照らす星の煌きが木々の虚しさをさらに引き立てる。
――その光さえも届かない木の下で、木の根に体を預けて見えない空を見上げていた。

ＤＭＭＯ―ＲＰＧ『ユグドラシル』
今となっては多くのゲームが出回っているが、初めは「五感を投入するゲームなんてやばすぎるだろ」なんて言われた新技術が使われたオンラインゲームである。
やりようによってはあんなことやこんなことも？　と目論む人もいたが、オンラインゲームである以上、Ｒ―１８指定行為の禁止などなど制限がある。
とはいえ現に、非常に高額ではあるが、本番可能なゲームが存在したりする。エロゲーもある。
架空の者……物？　とにかく、現実には存在しない場所やモノなんだから、法には一切触れていませんよ？　との名目でだ。

駄菓子菓子。

現実では本番行為を禁止されているのに、感覚的には全く同じことを出来るのはいかがなものか、と物議を醸している。

ただのゲームであればそこまでの問題には発展しない。

これが、ＤＭＭだからこそ問題なのである。

外装に五感を投入し、仮想の世界で現実にいるかのように遊べるシステム。

つまり、作りこみさえすれば、本物にも勝るとも劣らぬことができてしまう――発展次第では、思いつく限りのことができてしまうのだ。

そう。現実にはできないことを、架空でありながら現実のように感じることを。

例えば、このアニメ・ゲームキャラ可愛い！　やりてえ！　なんて思っても出来ない。

三次元より二次元だ！　と、どれだけ豪語しようとも存在すらしないので触れることも聞くことも何もできないのだ。

普通に考えれば当たり前。――だった。過去形である。

このゲームシステムを利用すれば、自分の理想の塊である異性と、あるいは異性に限らず人間に限らず思いつく限りのことを最高の気分で味わうことができる。

となれば、昨今の『そっち系』人気からすれば、理想のおにゃのことアレコレできた方が遥かに良いに決まっている。

しかも、架空の存在なので豚箱に出荷されることもない。
多少は値が張る。
で？　だから安く済ませようとして事態が発覚して人生を捨てるのか？
そう問われれば、誰もがそっちに向かうのは当然だった。
ゲームそのものの説明は一切ないが、ＤＭＭというシステムの説明はこの通り。
元が軍事、医療を目的としたシステムなのだから、使い方によっては危険であることに間違いはない。
現に。多くのＤＴがシステムにより骨抜きにされたのだから、その危険性は語るまでもない。
となれば、その手の産業にも大打撃。
何もただのＤＴ一般人だけがそれらを利用するわけではないのだから、経済、政治にも多大な影響を与えてしまった。
噂によれば、このシステムを利用したサイバー攻撃の開発も進められているんだとか。
ＤＭＭシステムの危険性、そして素晴らしさを説明するには、やはり１８禁要素を含めた説明が非常に分かりやすい。

損得を説明するのに『金』を提示するのも、誰もが金に少なからず固執するから身近で、考えやすいからだ。

なら、ＤＭＭシステムの説明も１８禁を絡めればどんな人間でも妄想を膨らませ、理解しようとし、頭を回転させ、話に没頭する。

他には起業するにあたって、目指すべき姿をＤＭＭシステムを通じて見せるなどプレゼンテーションにも役に立つ。

相手の目線に合わせるというのは非常に効果的だが、目線の判定など難しいところはある。

まあ、一言で表すとこうだ。

「妄想の世界ではなんでもかんでもアリですよね？　それを実現できます（架空ですが）と」

現在、私はそのＤＭＭシステムを利用したゲームの一つをプレイしている。

一日の大半、あるいはまるっとぶっ続けで１週間接続していたりしている。

ＤＭＭシステムに関しては寝落ちの危険性も揶揄されているが、特にこれといった影響を受けた感覚はない。

少々、ゲームと一体化しすぎな感覚があるかな、ってぐらいか。
そんな、いつも身を置いているゲームの風景に視線を投げる。
辺りにある木々は偽者ではあるが、非常によく出来た木のグラフィック。木々の擦れ合う音さえも、ただのサウンドだ。
今日一日、このゲーム随一の不人気地帯――リアル処理落ち不可避『魔樹の大森林』にいる理由の一つがそれだ。
現実世界にはこんな大森林は存在しない。……魔界とか魔法の森とか、そんなニュアンスの方が異質さは伝わるだろうか。
苔生した大地から生える何十メートルもの木々。
木々には蔦や苔がびっしりとこびり付き、枝の別れ道にすらまた別な木や花が咲く、凝縮された自然界。
前後左右上下。斜めから何まで背の低い木々が生い茂る草で、レンジャーやドルイドが揃っていなければ現在地どころか地形把握すら不可能。
一歩踏み入れれば、空を飛ぶか死なない限り森の中を彷徨うしかなくなる迷いの大森林地帯。
まあ、現実世界では完全にその逆の世界は堪能できるだろう。
コンクリでできたジャングルを。

――　一度でいいから、外に出て、一身に自然の恵みを浴びてみたかった。
そんな夢が、例え偽者であろうと、ゲームの中であろうと体験できた。
日中は絶対に外に出ること叶わず。窓は完全遮断。夜でも照明に使われる紫外線に注意しなければならないし、照明が眩しくて前後不覚にもなる。
けれど、外出したとしても、お供がいなければ周囲の風景も分からず、迷子確定。
迷子で済むのか、事故に遭って死ぬのか、はたまた変質者に攫われるかして、ろくなことにならないだろう。
もしも日中に無防備で外に出れば、温暖化で紫外線と照り返しがヤバイ今、全身火傷確定。
厳重に厳重を重ね、日光フル対策をすれば外に出られるんだけども、どっかでヤバイ薬品でも流出したのかって装備になる。
私の夢としては気兼ねなく当たり前のように外を出たかった。
気兼ねなく。
まあ、周りの人間からすれば、ずっと自宅でぐうたらしてられるんだから、最高に楽で幸せな人生だよねって羨ましがられるんだけど。
今年で１６だけど、学業の実績や資格からすれば大学レベルの知識だけはあるし、お

父さんの手伝いっていう仕事もある。
実際に使用してない知識になんの価値があるかは不明だが、他にやることも、やれることもないのだから、親の言うことだけは忠実に従おう。

「……にしても、ＤＭＭシステムの初携帯化が成功か」

まだまだ試験運用段階とはいえ、我ながら危険な発想をしたなとつくづく思う。
十分に実現可能で、コストもそこまで高いわけではない。会社の名を売るだけなら、十分すぎると判断した計画。
それをプランとして考えるきっかけを与えてくれた『ユグドラシル』には感謝してもしきれない。
私が、初めて出会ったＤＭＭＯ―ＲＰＧ。
仮初であろうと、これが無ければ私は世界に、人に触れ合うことはできなかった。
この調子で行けば、私が父親を社長の座から引き摺り下ろす頃にはケータイとＤＭＭシステムの連結の話も出てきそうだ。
いずれ……私のような人間でもＤＭＭシステムを利用した学校に通ったり、ＩＴ企業に就職できればと思う。

この産業はまだ始まったばかり。
それこそ、このゲームのように可能性は無限に合った。
無限に合ったはずだった。
それが、どうして、今日サービス終了なのだろうか。
サービス終了を知ったのは、会社の企画が軌道に乗った直後だった。
家にしか居場所がない私に、ユグドラシルは世界を見せてくれた。
家と言っても、付き人と2人だけで住む棺桶に、花を飾ってくれたのだ。
1周年記念で募集された『私の思い出』に、私の応募した想いが記載された時は思わず涙した。
まさか、プレイヤーの中に深刻な病気持ちで外に出ることができない人間がいるとは運営も思わなかったのだろう。
他のプレイヤーもそうだ。
体の病気で日光に当たれず、目さえも見えない人間が、『ユグドラシル』で初めて〝感覚で世界を知り、多くの人間と知り合った〟ことに感動したなんて思いもしないだろう。
私よりも過酷な生き方をしている人は大勢いるだろう。
けれども、私の生き様に涙してくれた、応援してくれた人達もいた。

中には、私と同じような人も現れた。
イイハナシダナーというスレッドも立ったっけ。
今となっては、悲劇のヒロインを騙ったお姫様ヒドイン扱いだけど。
まあ、それはそれでいいだろう。
この世は常に『陰と陽』の関係にある。
多くの人間が善行と見れども、誰もが良いと捉えるわけではない。
多くの人間が悪行と見れども、誰もが悪いと捉えるわけではない。
あるいは、陰と陽の狭間にあり、善悪の区別すらせずに流すかもしれない。
そして陰陽考えれば誰もが思い浮かべる『太極図』にある通り、陰にも陽にも、中には相反するはずの属性がある。
私が最終的に至った立場というのもそれに該当する。
善の中で決定的に断ずる悪。
普通はギルドに身を置くが、私には所属ギルドがない。
当然ながら、それに順ずるアイテムもＡＩもない。
もはや、フレンドすらいない。
あるのは、互いの利益を求めた取引相手か、不平や不満を書き連ねたメッセージくらいなもの。

「どうしてこうなったんだっけ」

思い返せば、始まりは些細なことだった気がする。
それが、陰と陽の関係で言えば、その人達にとっては些細ではなかったのだろう。
悪く捉えられただけの話。
幼い頃からゲームをやっているというのは、普通から考えるとおかしなことだろう。
けれども、何もやることがない私を悲しんでお父さんは突然ゲームをプレゼントしてくれた。
話題になっていたユグドラシルというゲームを。
ちょうど１０年前。今思うと６歳の頃からネトゲって尋常じゃねえ……
私がゲームを始めてすぐの頃に実装されたＰＶＰだ。
複数人によるＰＶＰ。
今となってはギルド同士のＧＶＧがあり、それに巻き込まれるとも意図的にとも言える割り込み参戦、などがある。
初めに実装されたのが、小さなバトルフィールドタイプのＰＶＰ。今は参加者ゼロの過去の遺物である。

参戦を表明した人数が規定に達すると、職業やレベル、装備に応じて２チームのどちらかに割り振り、拠点占領を主としたバトルの開始。
赤と青のチームに別れ、拠点のクリスタルを叩けばそのチームの色に変わり、時間経過と共に１０ポイント獲得。
プレイヤーを倒し、強制撤退させれば１ポイント獲得。
バトルフィールドによって規定ポイントは変わるが、規定ポイント獲得したチームの勝利。
戦績に応じてバトルポイントを獲得できる。
そのバトルポイントを利用して、バトルに有利な特殊効果を持つアイテムや装備を交換できるのである。
とはいえ、それらの遥か上位版がアホみたいに出ているので、過去の遺物である。
とまあ、そんなＰＶＰ時代から私の基本方針は確立された。
まず、ＰＶＰシステムの実装理由として『プレイヤーの無差別攻撃対策』である。
ゲーム上、プレイヤーキル……ＰＫも止む無し。
しかし、それでは初心者狩りやらなにやら、あまりにひどいのではないか。
では、闘争本能を報酬で煽り、無意味なＰＫから有益なＰＫへと。
それが、一切のペナルティなしのＰＶＰ実装の経緯である。

戦績がひどすぎて寄生晒し。あまりにもぶっ飛んだプレイヤーによる無双晒し。けっきょくは多対一のＰＫが行われアイテム剥奪されて本末転倒などなど。
ペナルティなしのはずが、さらなる致命的なリアルヘイトを招いたのは悲しい話だ。
とはいえ、その時はその時で楽しかったのは事実。
なかなか出会うことのないプレイヤーが、遥か遠くの世界のフィールドから、小さなバトルフィールドに強制収容されるのだから。
私の今の性格はそこで作られたと言っても過言ではない。
無双により開催が減れば、取りたいアイテムが取れない。
ならば、勝利が確定した時点で攻撃をやめ、エンジョイ勢とガチ勢のモチベーション維持。
それに反発する無双プレイヤーへの制裁じみた集中攻撃。
１人では止めることしかできない相手でも、全員の集中砲火を受ければ……死ぬ。
プレイスタイルは様々だが、私のようなプレイスタイルを取っている人間は今のところいない。
しかも、よりによって選択している職業が通称『地雷職』の最上位『ビーストマスター』。
ソロ特化で、通常は職業による装備、使用制限があるところ、死霊系を除きどんな武

装も可能という特殊な職業。
短剣、剣、長剣、斧、槌、槍、投擲、二刀流、弓、クロスボウ、スリング、杖、魔道書、魔法剣、魔法弓――全てが使用できる上に、魔法も死霊系を除き全て使用可能。
アンデッド関連以外ならば全部使えると言えば分かりやすい。
使用スキルも上位職程度の各職業向けの収集、作成、技能も持っている。
ここまで言うと、くっそ強いように見えるが、基本的には『自分が１００レベルで近接特化にしていても、８０レベルの特化職に負ける』ほどの弱さ。
そのせいか、ハイブリッド職を全種類５レベル以上を達成すると開放される最上位職『ビーストマスター』まで選ぶプレイヤーは、公式職業分布で明らかになったが、３人しかいないのだ。
最終職ですらこうなのだから、途中経過の職がどれだけの物か言うまでもない。
そんなハイブリッド職は、職業と種族の垣根を越えるほどの絶大な万能性を誇る。
人型を基礎とし、全役割カテゴリ・全属性に一つ一つ『変異・変身』の形で形態変化が可能だ。
自身がそれらの属性に変化するため、装備品を相反する物にして弱点属性との両立も可能。
不遇職独自のスキルが使いようによっては非常に優れているため、スキル確保のため

に選ぶ人は稀にいる。

その稀な人間が私を含み、たった3人しかいない。

ビーストマスターまで到ろうとすると特化職を何一つ経由できないため……〃ビーストマスターの真価を発揮しない限り〃全ての育成過程がご破算となる。

プレイヤーの処理能力を無視した膨大なデータだけが積み込まれた『万能を突き詰めすぎたせいで何もできないゴミ＝地雷』なのだ。

能力の一部しか使わない、使えないのであれば他の職業を経由した方が何百倍もマシだ。

揃える武具やアイテムだって少なくて済むのだから。

トドメとして、ソロで攻略不能とかダンジョンを除けばあまりないが、特化職には到底及ばないのでソロ以外では『地雷』扱い。

要するに、ソロ以外の用途は何一つない。けれど、重要装備の確保にはダンジョン攻略が必要不可欠。

この時点ですでに運営が謳う快適さは一切ない。

はたして、私みたいに「初めから地雷扱いされているからこそ、やりがいがある。地雷職で踏み躙るのが醍醐味ではないのか」なんて考えの人は他にいるのだろうか？

そう。地雷なんていくらでもいる。
今も昔も変わらないプレイヤーランク付け。
最強位は、『金持ち＋超人プレイヤースキル＋リアルラック＋リアルスキル＋ニート』――の、論外。
最高位は、『廃課金＋超人ＰＳ＋リアルラック＋リアルスキル＋廃人』――の、皮肉を込めて称えられる通称課金厨。
最上位は、『重課金＋良ＰＳ＋リアルスキル』――の、通称ガチ勢。
一般的で、『無課金＋そこそこＰＳ』――の、通称無課金ガチ勢。
最下位は、『無課金エンジョイ』――の、通称エンジョイ勢。
この振り分けはメインタンク・近接火力・射撃火力・魔法火力・回復の大雑把なスタイルにそれぞれ適用される。
さらにこの下のランク付けで『地雷』がある。
メインタンクのくせに、トレインできないしヘイトが稼げないし蒸発する盾役。
敵のカウンターや凶悪攻撃を封じるデバフ職がデバフを切らす。
タンクの次に生存していなければならないヒーラーが範囲攻撃で沈没。
火力職が調子に乗って火力出しすぎてヘイト管理せずに爆発四散。
逆に、火力職が同時にタンクまでし出せば、「〇〇さんが居れば盾募集せずに火力特化

でいけますよね！」とか、普通以上の評価を得られる。

一切攻撃しないでいいような支援職が、暇を持て余して攻撃するだけでも十分に優秀なのだ。

味方にいったいどれだけ貢献し、味方の負担を減らせるか。それを褒め称えられる快感をなんと言い表せばいいのだろう。

無課金勢が、ｗｉｋｉや他人知識だけ振りかざして「地雷地雷」と連呼し、盾も火力も回復もデバフも遠距離攻撃も全て対応できると知った瞬間の掌返しのおかしさといったらなんと言い表せばいいのだろう。

なんでもかんでも出来すぎて、すごいを通り越して「動きがキモイ（褒め言葉）」「キチガイ（褒め言葉）」と言われる優越感。

それだけのことをできてしまうと、プレイヤーランク付けは1段階以上アップすると見ていいだろう。

この辺りは大昔と比べて大きな変化はないらしいが、ＤＭＭシステム独特と言えるのが『リアルスキル』の要求だろうか。

戦略とか駆け引きとか、そういうのは昔と変わらないけれど、規模が全く違うのだ。

簡単に言おう。これは戦争だ。

常人であれば、キャラ同士のぶつかり合い、相手の姿や、常用する武具や魔法、武技、

それらの効果からスキルなどの判別。それに対策を考えての反撃、回避、行動。
相手も同様の考えで動くのだから、その動きの巧い拙いで強さを判別、優先順位の確立などなど。
まあ、これだけでも非常に高度な思考らしい。
ＤＭＭＯ―ＲＰＧでは、さらに拍車を掛ける。
戦闘地域のフィールド属性・周囲環境・地形・本拠地・陣地・常駐モンスター。それらに僅か一つでもプレイヤーの干渉が発生した際の波紋。
これらを考慮した上での周囲監視・トラップ・周囲ギミック擬態・他者の行動を餌に釣り・どこかでの戦闘終了後の第三者以降の干渉・全てを終えた後の他ギルド、他プレイヤーの風評や波紋。
ある意味、そこは一つの世界である。
現実であり得ることは全て発生し得る。
派閥しかり、相手の立場を考えない一方的な意見などなど。
それだけならいい。
そう、『その程度だけで済めば』良い。
プレイヤーが選べる種族は４２０種。人間を除く種族は上位種を経由して基礎ステータスの高いものに進化していく。

職業は基本職、上位職を含めて２０００以上。限界レベルは１００。
これらを組み合わせ、打撃射撃魔法回復バフデバフ攻撃防御回避索敵製造などなどなどなどの育成目標を立てていくと、ふざけた数のキャラクターが生み出せるだろう。
まず、プレイヤー同士のキャラや育成がだぶることはないと言っていいくらい。
それらの要素を含めれば最大レベルは何考えてんだ運営ってぐらいに低すぎて笑えない。
膨大すぎるデータに、保有ＡＩも手を加えられる上にモンスターを生み出せるわ、何か持たせられるわ、でプレイヤーの頭がフリーズ間違いなし。
これらを踏まえ、敵対プレイヤーに遭遇するたびに装備を見極め、どの条件に適合した種族職業なのか、自分の種族職業で対応可能か一瞬で対応しなければならない。
どれだけ困難なのか、例を出そう。
拠点落としに一人だけのプレイヤーがゆっくりと隠しもせず臆せず現れる。
あなたは上位プレイヤー２０人パーティのリーダーです。どういう指示を出しますか？
その時に想定しなければならないのは、以下である。
攻撃しようと動き出したら、相手は重課金＋超人ＰＳ＋リアルスキル持ちの公式チートでした。

上の上プレイヤーで苦戦しつつも持ち応えている間に本拠地が落とされていました。倒したと思ったらこちらの力量がバレて、勝ち目のない新たな敵を放り込まれました。

ただの囮で、触れても触れなくても範囲魔法で消し炭にされました。

ただの囮で、その後に何も起きず、ここで待機か引き返すか、周囲を調べるかなどの選択肢を迫られ、動いた途端に……

考えるだけのことが、全て起き得る。フェイクもそうだ。

戦争に於いて必要なのは、その全ての想定と常時・即時・後時対策である。

それが『ユグドラシル』というゲームの自由度とかどうかいうレベルじゃねえよ、のフリーダムさである。

まあ、たしかに。こりゃ大元のＤＭＭシステムが軍事目的なら演習でもなんでも、新技術の実使用による影響とかいくらでもやれることありますわ、と頷ける。

「他にも、実際の肉体では実現できない超スペック環境における肉体操作による潜在能力の覚醒、応用による治療とかか」

現に、私自身がそれを現実世界で実感できている。
今まで、全くと言っていいほど見えなかった目が、誤魔化された五感を通し、体に影響を与えたのだろう。
視力が、大きく回復してしまったのだ。
分厚いメガネをかけても、なんとか輪郭が理解できる程度にしか見えない目が、通常の視力測定可能領域まで回復したのだ。
この結果が大々的に報じられたのも、昨日のように思い返せる。
お父さんが、ゲーム会社の株を大量に買って感謝、支援したのは苦い思い出だ。

その結果として、公式に発表されていない大口株主に与えられた最高のアイテムデータを得られた。
倒したプレイヤー。倒したモンスターのステータスデータを全て保存し、任意に使用できる。
ただし、１００％の力を発揮するのではなく、７５％の力でしか発揮できない。
まあ、そりゃそうだ。苦労して作り上げた最強のキャラを、全く同じ形で『モノマネ』あるいは『変身』の形で奪われたのでは泣けてしまう。
が、このアイテムは全てにおいて半端なのだ。

プレイヤー名は誤魔化せないし、本体の性能が劣る上に、装備も全て複製であって、当然のごとく本来の７５％の能力で追撃の脱着不可。

特化職のステータスに対して７５％の形で再現できるのではなく、武装全てに対してきっちり７５％と計算する。特殊技能や装備による『〇〇％ステータスアップ』は最終的な数値に対して計算が行われるので、戦闘力で言えば本物の５０％にも満たないかもしれない。

最大の強みは、何のペナルティもなしにどんな種族、職、スキルを引き出せること。しかも、データだけの入れ替えならば見た目は変わらない。

やろうと思えば、見た目は魔法特化なのに、中身はモンク、ファイターだって可能だ。もちろん、それら技能もきっちり７５％計算になることを考慮しなければならない。

フェイク。見た目詐欺。外面だけ詐欺るのもありだ。このアイテムの真価は、それらにあるのだ。

――と、いうのが私の使い方であって、実際にはただのエンジョイアイテムである。

膨大な数の種族職業選択の幅があるのに、実際に遊べるのはほんの一握り分だけ。いくらなんでも悲しすぎる。

戦いに特化しすぎて製造系がおろそかなら。収集がおろそかなら。それらを補うというのが本来の使い方。

とはいえ、私のキャラクターは万能型なので頼ることはない。
運営の用意したデータでアレコレ遊べる。ゲームを余すことなく遊べる。素晴らしい。
でもまあ、自由度が高すぎるゲームだし、ある程度の強さもないとゲーム自体が楽しめない。
ということで、入手したあらゆるデータの実際の能力の７５％を再現するアイテムなんていかがですかねーと運営との協議の上で製作してもらったのだ。
奪われても返しませんけど、って条件付き。
使いようによっては危険だが、私のプレイスタイルから悪用はないだろうと判断してもらい、晴れて７５％とそれなりの数値で実装。
まさか、ギルドとダンジョン除くフィールドの全把握、８割以上の種族、職種、武技、魔法、スキル、アイテム、武具を脳内インプットしているとは思いもせずに。
まさかのまさかで、大事に大事に保管された病弱箱入り娘のはずが、ゲームを有利に進めるために武術から何まで習得しているとも思わなかっただろう。
私の家系は、嶋貫電気株式会社としての名もあるし、小さなパーティーに招待されるだけの地位と金がある。
それに見合った技能や社交性は求められるし、求める以上の能力を発揮してもらわな

ければならない時だってある。
周囲の人間は天才だとかもてはやすけれど――
単に、自分にとって全てと言ってもいいゲームを禁止されたくないがために、努力していたなんて言えやしない。
同じ年頃の人なら私と同じことを考えるはずだ。
ゲーム禁止を回避するために、親が文句を言えないほどの成績を叩き出すなんて。
「運営さんさえ、そうなんだから、まさか他のプレイヤーもこんなアイテムを隠し持っていて、使いこなせるとも思ってなかったんだろうなー」
悲しむべきサービス終了日。
私は見知ったギルドリーダー数名に最後のイベントと称して無差別ＧＶＧを提案した。
戦場はここ、私の大好きな『魔樹の大森林』だ。
ここは県ひとつ分まるっと森に覆われている、徒歩で遭難確定地帯。
ユグドラシル最多の様々な種類のモンスターがポップする特殊な場所だ。
そのため、レア狩りなどの効率が非常に悪い上に、環境が環境だけに、最初に発見し

た『ワールド・サーチャーズ』以外ほとんど誰も訪れていないと公言されている。
最後の日を楽しんでいるプレイヤーは大勢いるだろうし、巻き込んだら大迷惑である。
最後の大戦争は、誰もこない場所で大々的にやるべき。
ただ、さすがに全面が森では、遭遇せずに終わりなんて不完全燃焼もあり得る。
１週間前から森林伐採して整地して、ようやくバトルフィールド完成。
参加者がさらなる参加者を募り、合計１２ギルド。総勢５００人が大戦争に集結。
今まで眠らせていたワールドアイテムやギルド武器のお披露目会を終え、思い思いに語り終え……

辺り一面に斃れ伏し、思い思いの呪いの言葉をチャットや感情タブの連打で吐き出している。
死屍累々。
皆が、サービス終了を無残に迎えた。
主催者のくせに、私がどのギルドにも所属しなかったことに疑問を抱いた人はいたが、「それがイザナさんのプレイスタイルですもんね」と誰もがで納得していた。

基本的には戦力の薄い側に立つ。
どう足掻いてもかわいそうな側に立つ。
常に被害者側に立ち、唯一の万能職の力を発揮する。
相手が打撃特化だろうが、魔法特化だろうが、支援特化だろうが、５人ＰＴだろうが。
私なら一人で全て補える。
打撃最強プレイヤー？　ならばハイブリッド職限定の豊富なデバフ付き攻撃とノックバック、足止めのオンパレードで封殺してやろう。
射撃最強プレイヤー？　ならば足止めスキルとスタン攻撃を駆使して打撃と射撃の判定の境界から封殺してやろう。
魔法最強プレイヤー？　ならば命中低下詠唱低下、鈍足、足止めを駆使して密着し封殺してやろう。
防御特化プレイヤー？　ならば物理と魔法２種類の足止めを駆使して私以外の人間を払って存在意義をなくしてやろう。
回避特化プレイヤー？　ならばヒットに関係なく強制デバフの魔法を起点に回避低下、スタン攻撃と足止めスキルでサンドバック化してやろう。
……今思うと、打撃防御特化の、素で魔法防御も高い回復職に対して効力のあるものないな。回復タンク有能説浮上。

まあ。そもそものハイブリッド職の存在意義が他の職と全然違うのだ。それらを考慮した上での職業であれば、不遇とは言われることもなかっただろう。

ハイブリッド職とは、ソロプレイを前提とした状況に応じて一人で対応できる力を秘めた職業である。

スキル、技能を取らずとも職業補正でそれなりのパッシブスキル、製造技能が付与されるのでソロ生活で困ることはあんまりない。

当然ながら、ＰＴ必須なダンジョン攻略ではお呼びではございません。

当然ながら、対人戦ではあまりの雑魚っぷりで、通りがかりついでに一応殴って撃破数稼いでおくか、なんて道草扱いである。

至近距離に魔法職が居ようと、優先的にぶん殴られるくらいに扱いがヒドイ。

そんなハイブリッド職の特徴と言えば、思いつく限りでは……

使用可能な独特なスキル、魔法全てに異なるデバフが付き、範囲攻撃が小範囲から超広範囲、ハイブリッド職限定で極大範囲、エリア全域まである。

広範囲になればなるほど威力はゴミほどに低下するが、『問答無用でヒット』する回避貫通攻撃による、隠れている敵の炙り出しが驚異的。

エリア全域スキルは気候変更なので、ハイブリッド最上位職のビーストマスターいますよ！　ってアピールにしかならない。もちろん、たった3人しかいないが。

他の職にあんまりない命中上昇、回避上昇、移動速度上昇、範囲持続回復、打撃射撃魔法それぞれの足止め束縛系スキルが大量にある。

ある意味。特殊バフ、特殊デバフ、範囲に特化した職とも言える。

あと、使用可能スキルと魔法のカテゴリも多く、それに見合った膨大なＭＰを有する。

膨大なスキルによるクールタイムを考えなくていいことと、詠唱不可・スキル不可などのデバフが無意味に等しいとか。

全武器・武具・アイテムカテゴリを扱えるのも利点だろう。最終的には倉庫圧迫になるか、使わない物が転がるオチだが。

……だいたいこんなもん。

攻撃力はお世辞にも高めとは言い難いが、敵を一箇所にまとめたり、引き寄せたり、引き剥がしたり、目標を始点としたバージョンの特殊な攻撃が強い。

後方支援に徹すれば……正直、真っ先にぶち殺してやろうかってぐらいのリアルヘイトをかき集められるだろう。

で、持ち前のリアルヘイト上昇スキルと範囲攻撃を利用して、攻撃時・被ダメ時一定確率で発動系のアイテムの強制発動も醍醐味である。

もちろん、そこに到る前に狩られるのがハイブリッド職の通過儀礼。

死んで死んで死んで死んで死んで絶望して悟りを開いた上でしか辿りつけない境地

の先に扱い切れない膨大なスキルが待ち受けるのだ。
トドメに、けっきょく最後は誰かに製造依頼とかしないと自分の最強武装すら作れない、作っても特化職に及ばない現実が突きつけられる。

「所詮、特化職が一番劣っているステータスよりは高い程度の性能だし……」

それを補うＰＳと、装備。それを補う廃プレイに廃課金。
そこまで行くと、上級プレイヤー程度の特化職ならば２秒あればシュンコロだ。
最高位プレイヤー相手なら、相手が苦手とする形態を主軸に、お互い削り合うだけの消耗戦になる。
私は複数人まとめて相手できるが、相手は複数人で一人を処理するのだ。……戦力過多ってやつになる。
私がどんなやつか知っている人だと、戦力分散を回避するために着かず離れずの絶妙な距離で束縛系スキルを駆使して試合中貼り付けってこともしてくる。
もちろん、味方が私をずっと放置することもないし、時間稼ぎにしかならないのだが……上位ライン以下キラーの私を野放しにした場合を考えれば最善策かもしれない。
普通なら、１人に対して多数でかかれば多数の勝ちだが、私の場合は逆なのだ。

ゴブリンの笛でわざと周辺にゴブリンを撒き散らした上で、自分を始点とした範囲攻撃を発動すれば、身に付けたアイテムが全て特殊能力を発揮する。
効果時間はものの数秒だが、デバフを駆使すれば、命中率が高く純粋な回避が不可能とされる雷・風系魔法や範囲持続攻撃すら回避し続けるなんて異常事態も引き起こせる。
避けてる間に範囲攻撃を繰り返してれば常に最強バフ発動である。
それに気付いて敵が逃げようとする前に、私と遭遇した時点で距離を離すも近付くも私の思うがまま。
武装で補っているとはいえ、上位特化職が数人纏まらなければ、何をしてもビクともしない、ダメージを与えても持続回復や吸収攻撃で即回復。
しかし、こちらからは一人一人着実に捉えて削り殺していく。
手も足も出ずにじわりじわりと体力を削れて死ぬのは凄まじいリアルヘイトだろう。
事実、敗北して自陣にリスポーンしても真っ先に私に群がるという経験もある。
そのおかげで対人戦に圧倒的大差で勝利し、撃破されたプレイヤーが私のみ。
けれど、1対多数でありながら、多数側が「イザナ倒したぞザマアアアア!!」「雑魚乙!!」なんて雄たけびを上げていたこともあった。

「もうその時の人達はいないんだよね。いつか絶対に全員まとめてぶち殺してやるって思ってたけど、まさか本当に実現できるとは思ってもなかった」

しかも、何十人という規模ではない。

５００人まとめてはさすがに無理だったが、３２７人も撃破すれば、もうタヒれってレベルだろう。

もしも、この中に最高位プレイヤーがいれば、私とその人の攻撃に巻き込まれて周囲の人達は蒸発する結果になっただろうが。

……さすがに、最高位プレイヤーの特化職相手となると劣化職ごときでは相手にならない。

足止め前提、封殺前提。

同じ土俵で戦った瞬間に負ける。

倒し切りはできないが、野放しにして味方が崩壊するよりは最高位プレイヤー同士で相殺しておくのがいいだろう。

そもそも本気で最高位プレイヤーとタイマンで戦えば互いに膠着状態になって終わりはない。

ほんの一瞬でも操作ミスをすればこちらが蒸発するけれど、今まで一度も操作ミスな

んてしたことがないし、片手間で他の支援くらいはできる。
最高位プレイヤーを片手間で完全封殺しながら、他のプレイヤーを狩ったり、支援し、別地点へ転移して同じことをする……足止めの効果時間が切れそうな時間になったらまた戻る。
それを十年は続けてきたのだ。
今さらミスなんてするものか。
私が以前投稿したプレイムービーは未だに関連動画１００位圏内にある。私の敗北動画でもあるけれど。
ユグドラシル最大のＧＶＧに参加して、最強プレイヤーの足止めをしながら3階層に及ぶ味方への支援と、敵プレイヤーへの嫌がらせ。
今さらながら、こいつチートじゃね？　ってコメントもあるけれど、かの悪名高すぎる敵ギルドのせいもあってか何事もなく終わった。
私にできるのは、得意とするのは、誰も脳内処理しきれないほどごった返しになった戦場で、致命的な打撃を与えていくことなのだ。
そもそも、万能型のビーストマスターでフル課金特化職を相手にすること自体が間違っている。
無駄死にするくらいなら、全力で足掻いて巻き込んで私にヘイトをかき集め、味方が

自由に動き回れる環境を作る方がいい。
一番の危険要因はプレイヤーなのだから、戦略的にプレイヤーを削るのは間違いではないのだ。
特に、今回のような、よくて最上位程度のプレイヤーが少しいる程度の戦場とか、得意中の得意分野。
――で。
一気に対人撃破数を稼いで見たことも聞いたこともない称号と武装を手に入れてしまった。
剣やら斧やら杖やら、各種武器、鎧や布系の防具が運営からのメッセージと共に大量に送られてきた。
どんな武具、アイテムでも使えるビーストマスターだからこそ、現物ドロップとか課金装備、支給装備で「これ装備できねえんだけど！」ってのが無い。
運営ＢＯＸにアクセスすると、全てに『災厄の漆黒の』と２つ名が付いた上級製造武具の亜種が入っていた。
元となった防具は神話級防具で一番楽に作れるやつだ。性能的には、フル強化してれば最終位ダンジョンＰＴに入ってもＰＴから蹴られないくらいか。
運営からのメッセージにはどんな獲得条件を達成したか明記されていた。

称号。
『死神』
対人撃破数１２万人達成。
暴虐の尽りに同じ人間すら恐怖する。
『災厄の使途』
同時に２０人以上から攻撃を受け、かつ、全員を撃破。
遭いたくもないが見過ごすこともできない天変地異そのもの。
『守護者殺し』
カウンターガーディアン。
ギルド武器所持者を通常の装備で累計１０人以上撃破する。
ギルド武器を超越する真の強者の証。
『災厄シリーズ』
プレイヤーのＨＰを最大値からゼロまで個人のみで削り切り、対人撃破数５００００人達成。
持ち主に対してのあらゆる感情を激化させる。
プレイヤー撃破数が増えれば増えるほど能力が上昇していく。
『災厄のオーラ』

独力で夥しいプレイヤーを倒し、リアルヘイトを掻き集めた。
持ち主に対してのあらゆる感情を激化させる。
一式装備による特殊効果。
周囲の知的生命体の感情を激化させる。常にヘイト＋５００％（パッシブ効果）。
武器装備時、聖耐性、闇耐性が上昇し、闇属性攻撃の威力が＋５０％上昇する。
オーラ装備時、聖耐性、闇耐性が上昇し、闇属性のダメージを１０％だけＨＰに転換する。
設定など内部のデータを参照する。
上位者に対し、常に感情を刺激させる信号発信。
下位者に対し、多くの強者を屈服させたオーラにひれ伏す。
常に感情の扇情効果を発揮するが怒りだけというわけではない。感情全般に対して効果を発揮する。
試しに装備してみると、外装はアバターにより上書きされるようだ。
盾職向けの装備だけど、データ嵌め込み枠も大きく、素の能力も高い。
アバター効果もあってなかなか汎用性が高い。さっそく全ステータス＋１０のアイテムを枠いっぱいにぶち込む。

「おお！　アバター優先とか超レアじゃん!!」

でも、もう終わりなんだよなー。

大きなため息を吐いて、辺りを見回す。

今頃、この大虐殺がネットにアップロードされているに違いない。

リアルヘイトのあまりの高さに迷惑をかけるからと、ギルドに身を置かず傭兵生活。

基本的にソロプレイ。

４日かけて『魔樹の大森林』に出現したＷＢのソロ討伐とかバカみたいなこともしたっけ。

討伐時にはトドメを差した人、最大与ダメ、最大被ダメの人を称えるテロップメッセージと、参加人数とか出るけれど……全部１人の名前。

何が起きた！　って騒然となったっけ。

ＰＶＰ時代の移り変わりからはひっそりと暮らしていたから、引退したかメンヘラ野郎とか色々言われてたし。

テロップ表示と同時に色んなギルドから勧誘がきたものの、所属はせずに交流を深めるだけに留めていた。

交流しただけで晒されるんだから当然だ。

他にも色々と晒されている人が多くいたから被害は少なかったんだけど……持っているものが持っているものだけに、それなりの扱いはされていた。

運営会社の株を保有している者にだけ配布される『好きなアイテム1個券』と『黄金の翼』はワールドアイテム級のレア度である。

頻繁に交流していたキャラクタークリエイト特化ギルドの防衛依頼を受けた時は、ギルドの全権限と引き換えに欲しいくらいだ、と冗談なのか本気なのか分からない話もしたっけ。

そもそも、外装アバターのくせに特殊能力を保有していることに問題がある。

重量ペナルティやトラップ、魔法、攻撃による阻害は一切なし。翼に当たり判定はない。

翼に攻撃しようがされまいが関係なく空を飛べる上に移動速度上昇。飛翔速度も大幅上昇である。

なお、全移動速度バフをかけると1日で世界の端から端まで移動できる制御不能っぷりを発揮できる。

ｗｉｋｉの謎項目『飛翔による風圧ダメージ』を手がけたのが私だとは、誰も知らないだろう。

そもそも、全移動速度バフをかけるには３４人のプレイヤーが必要で、情報が漏れな

いはずがないのだ。
大口株主特権で実装してもらったアイテムなくして、実現不能。
『オール・リヴァイヴ』――全ての再現。
ただの指輪なので、１０円改名アイテムで分かりやすい表示にしちゃってる。
大口株主と運営の協議で新アイテムを実装できます、なんて書いたら運営と私にどれだけのメッセージが届くのやら。
それを利用して、飛翔速度が一定を超えると風でダメージを受けます。何かにぶつかると対策をしてなければ即死の危険性とか、誰がやるんだよって感じだけど。
「ははっ。思い返してもソロプレイしか出てこないじゃん。協力プレイっていったら、初期の頃だけの話で、それなりのレベルになった時点でずっと独りなんだ」
リアルでも、ゲームでも孤独。
こうやって身を置くエリアにも私だけしかいない。
戦場にいたプレイヤーは思い思いに言いたいことを言って、最悪の終わりを迎えて退場した。
１２ギルドのギルド武器、ワールドアイテム、ゴッズアイテムは全て回収済み。

大手ギルドではないし、ギルド武器は対した性能まで高められちゃいない。
さっきもらった武器一式の方がよっぽど強い。
せいぜいデータだけ取ってガラクタ保管庫行きか、分解材料行きだ。
なお、１２ギルドもあってワールドアイテムは１個だけの模様。
『ドッペルゲンガー』――完全分身。見た目はただの可愛い人形。外装データをぶち込んで見た目を変えられるようだ。
自分と全く同じデータのキャラクターを生み出す。
プレイヤーと全く同じ動きを遅れて行う。分身が受けた、発動したバフ、デバフは本体と共有される。
ＨＰは別管理だけど、その他は私と同一判定という意味か。
分身を殴っても痛くはないんだけど、分身を回復するとなぜか私も回復する。
分身を殴っても痛くないくせに、デバフを受けると私も同じデバフにかかる。
逆に、私に対してそれらを行うと、分身にも同じことが起きる。
……ああ、なんだろう。これは。私のデバック魂が掻き立てられるよ！
本来なら１本しか設置できない範囲持続回復大を１０秒ごとに発動する生命樹を使ったら同じことしてくれんの!?
詠唱含め、設置に５秒かかるから、持続回復付き回復大ヒールを５秒ごとに!?

本来重ね掛けにならないこのヒール効果が重複したらどうなるの!?
試したい！

「はあ。時間ないんだよね。ま、最終的な私の実力調査はできたし、次にのめり込めそうなゲーム探さないと」

それとも、もう一つやってる戦略ゲームに専念しようか？
というか、今何時？　もうとっくにサービス終了、鯖を落とされていてもおかしくないはずだ。
コンソールを開き、現在時刻を確認しようとし……何も起きない。
え？
バグ？
え、これどうやって接続解除すんの？
え、ええ!?
今思うと、ＤＭＭＯ―ＲＰＧのサービス終了って、ユグドラシルが初じゃないの!?
うっそ、まさかのシステム解除作業失敗したわけ!?
意味は無いけれど、慌てて『黄金の翼』を広げ、空に飛び立つ。

その瞬間に、あり得ない感触が肌を伝わった。

「木々のにおい。生々しい、実際に触れている感触。リアルすぎる音響。網膜に響く星の輝き。――そして、風の音」

なによりも、『黄金の翼』が生き物のように羽ばたき、羽毛をきらきらと撒き散らしている時点でおかしい。

自分でデザインして可愛いからって好きこのんで履いてるスカートが夜風ではためいて、ダイレクトに股を冷やしていく時点で色々とおかしい。

外でこんな破廉恥な超マイクロスカート履いて黒ピンク縞々ニーソに紐パンって感覚の生々しさが色々とやばい!!

ここは誰もいない自室なんかじゃなくて、どこで誰かが見ていてもおかしくはない開放的な外!

「わーわーわーわー!! なに!? なんなのこの感覚は!? うぎゃ、翼の付け根が、翼の先っちょのあり得ない場所の感覚がー!?」

無意識で飛んだは良いけれど、〝実際に己の体の一部として動かして飛ぶ行為〟に気付いた瞬間、鳥でもなんでもない人間の私は飛び方を忘れ、５０メートル上空から真っ逆さまに落下してしまった。

ゲーム的には、ダメージ０。木々にダメージ２７００。衝撃が緩和されて無限ＨＰの地面に２０ダメージといったところ。

けれど、急に浮上した生々しい感覚が、普段外に出ない私に一挙に叩きつけられた。

悲しいことに体の感覚が遠のき、意識が消える。

これが、高いところから飛び降りる感覚か。

高層ビルからの自殺では、地面に叩きつけられる前に気を失ってから死ぬって聞いたけど、こういうことなんだね。

薄れ逝く意識の中で、また新たな知識を得たなと、能天気にも喜んでいた。

001．小悪魔な天使

意識が覚醒すると同時に、モサァッ！　という感覚が背中から押し寄せてきた。
びっくりして飛び起きて、ロフドベッドから低反発マットに飛び降りようとし……は？

「何ここ。私の部屋は？」

視界に飛び込んできたのは、そよ風を受けて柔らかく揺れる薄いレースのカーテン。
ふわっふわの極薄レースのカーテンが6畳一間ほどもあるベッドをぐるりと囲っている。
正面以外を薄いピンクの少女趣味丸出しの厚手のカーテンが一部たくし上げられ、たくし上げた皺が超豪華なベッドの物々しい雰囲気を醸し出す。
なにこの6畳一間をまるっと使ったベッドは。
マットレスなんか、水の上に浮かんでるみたいな感じだし、シーツのひんやりサラサラっぷりがやべえ！

掛け布団から漂う、本物の花の香り……たまんないっ！

なんなのこの、女の子が憧れる御伽話のとんでもない王宮の寵愛されしお姫様の一室的な雰囲気はあああ!!

翼を前後にバッフバッフ動かして足先でベッドを引っかき、ズリズリ移動してベッドから降りる。

はい。本当に感想通りのお部屋。ありがとうございます。

漫画やアニメでしか見ない豪華絢爛の極み。

ベッドから降りると、まず目の前に鎮座している『〇家パイ』の模様みたいな、てきとうに描いた波の線を寄せ集めたような、取っ手に繊細な掘り込みがされた食器が複数。

花柄のプレート。欧州貴族なら使ってそうな、煌びやかな金細工が施された小さなコップ。

思い浮かぶ表現の言葉は最悪だが、分かりやすいイメージを抱けそうな単語と言えばそんなところ。

抽象的で分かりづらい言い方をすれば、ゴシック調の内装、家具一式。

内装課金ガチャをやりまくってる人なら、ゴシックでだいたいどんな装飾か思いつくだろうか。

すんすんと鼻を鳴らして、見るからに何か入ってる壷のにおいを嗅ぐ。

「りんごっぽい甘い香り。水？　紅茶？　これ、ポット？　口空いてるくせに、容器自体はひんやりしてる」

おっと。お父さんから注意されている独り言が口から溢れまくり。

ただ、これだけ凄い物を見せられたら、そりゃ独り言も出ますよ。

食べていいのか不明なお菓子も、すっごいうまそうな匂い出しまくり。

紅茶葉入りクッキーだよこれ！　焼いてんのに鼻腔をくすぐる芳醇な香り！

ただの丸とか四角じゃなくて、レースみたいにところどころ穴開いてて、綺麗な凹凸で模様まで描いている……宝石みたいなお菓子だ。

で、でも、部屋の雰囲気的に勝手に食べちゃいけない感が半端ねるら！

「よし。落ち着け。冷静になろう。社長令嬢モードになろう」

ふう、と大きく息を吐く。

さて、リセット完了。まずは状況の確認が必要だ。

背中の翼は健在。部屋にある鏡で見る限りでは、ユグドラシルのキャラクリそのもの。

そのものというよりは、異様に生々しくきめ細かくなっている。

誰だよこの美少女。基本的に自分を雛形にデザイナーにキャラデザ依頼したけど、実際の私はこんな美の極みじゃないんだけど。

体には気を使っているけれど、どう足掻いても病的な白さのせいで、綺麗とか可愛いとかとは無縁の『死体』っぽい感じが抜けないはずだ。

我ながら死体という表現はひどすぎた。幽霊と訂正しよう。

ただ、自慢ではないけれど美形ではあった。

外に出ない。華奢な女の子を崩すような運動はしない。などなど、病気というデメリットを消すだけの美は磨いていたつもりだ。主に両親の方針で。

でも、生きてるんだけど生きてない。人形とも、マネキンとも言える空虚さだけは消えない。

整形してるんじゃ、とか囁かれるくらいに作られた感があるらしい。

お母さんは、あまりにも綺麗すぎるから逆に疑われるのかしら、なんて言ってたっけ。

鏡の中の私はというと、痩せ……もとい、ガリという感じがしない。

ほどよく運動して張りのある、生き生きとした肌をしている。

元の身体的特徴はそのままに、と言ってキャラクリしてもらったので大部分はリアルと大差ない。

成長期まっさかりの１６歳ＪＫでありながら、１４２センチの低身長、ＡＡＡカップも忠実に再現。

先天性白皮症。通称アルビノの身体的特徴である、シラガ。白髪。リアルであれば真っ黒に染めてるのだが、ゲーム内では素の白である。

眉毛もご丁寧に白い。

瞬きもしてる。本当に生身の人間みたいだ。

ほっぺをもにゅもにゅすると、ちゃんと肌も動く。

お肌は手で触れるとぴっとり吸い付くくらいのもっちもちっぷり。

まだむず痒いけど、翼も伸ばしたりなんだりできる。

リアルでは筋力がそれほどないけれど、護身術としてゲームのために武術を嗜んでいるために、体の感覚の掴みは早い。

ＤＭＭＯ―ＲＰＧが巻き起こした副次効果――武術人気。

若者の人間離れした身体能力がなぜか深刻な話題としてメディアに流れたのは記憶に新しい。

はあ……こんな体じゃなければ、オフ大会にでも行ってワールドチャンピオンの職業

の座を狙ったというのに。
鏡の前で、自分を確認しながら正拳、蹴り、スウェー、体移動、体重移動、バランスなど、身体能力の確認を行う。
指一本で体重を支えて逆立ちできるのは笑える。
しかも、小指で逆立ちってなんぞ。
折れるどころか、指が全く曲がりすらしないこの強度。
ＲＰＧで女キャラのレベル、体力とか腕力が高い場合はこうだろ、ってお笑いスレがあったっけ。
筋骨隆々の笑える絵ばかりだったけれど、実際には中身だけが怪物レベルになっているようだ。
見た目が華奢で可愛いのに、中身はゴリラ顔負けの怪物とか、それはそれで怖いけど。

「ふーむ」

鏡の前で腕組みして、自分を眺めながら唸る。
ふと思いついて、ポケットに手を突っ込む。
右手がポケットを突き抜けて、肘まですっぽりと収まる。

奇妙な無限空間。アイテムポーチもとい、無限ポケットである。

収納部分のある外装にデータを貼り付けると、外装を一切崩さずに無限の容量を誇るポーチとして使用できる。なお、ポケットである。

再販は2年に1回のペースで、アバター総集ガチャの景品の一つであるため、年ごとに入手難易度は膨れ上がる。

デザイナーの巣窟、キャラデザギルドの人達に羨ましがられる逸品の一つ。

無限ポーチの時点でどんな人でも欲しがるんだけど、外装を一切崩さないというのが人によっては最大の魅力なのだ。

使用感を求めるなら、ただのポーチ系か。

無限ポケットの欠点は、ショートカットができないため手作業でアイテムの出し入れをしないといけないのだ。

なんだかんだで私も外見を重視しているので、このアイテムは意地でも取りたかったやつだ。

自分の職業を考えれば、夥しい防具やスキルのせいでいＳＣ枠なんてないし、それでも足りないから手動切り替えするくらいだし。

意地でも欲しくて、実装当初のガチャで７０万円かけたのは伏せているけれど、それを知ったら誰もがカラ笑いするだろう。

ハズレとかダブりもいっぱい引いたけど、今となっては入手困難で値段も高騰してるし、最新アバターの交換に使えてむしろ儲けてるぐらいだ。
なお、後からすごい高騰しそうだからと無限ポケットを１０個所持しているのは誰にも教えていない。
にしても……お父さんも、よくもまあ、１０歳お祝いで私にこんな大金をはたいたな……
お母さんはお母さんで少女趣味全開のゴスロリ服を自作してたっけ。
さてさて、問題はこれの使い方だ。
中に入ってるアイテムのコンソールが出ませんよ、運営さん。
もちろん、そのメッセージに反応するものはいない。
運営を支えた最大の金ヅルに無反応。これはあり得ない。
ただ、こんなでも無駄に社長令嬢なのである。２８歳の長男を差し置いて、次期社長候補と謳われる私の頭脳を見よ！　天然だけど！
来たれ、デニッシュ！
「きたー！　さすが私！　さすわた！」

ポケットから出した手には、見事な焼きたてのパン。なんで焼けてんの？　なんで焼けたて？

素手で触ってて、温度からして熱くて持てないはずなのに、なんで平気なの？

想定はいくらでも可能だけれど。

いっそ、いちいち感動するのやめて推測を全て確定してもいいか。

無限ポケットには、各地に点在する食料製造拠点の無限ポケットとリンクしてある。

物が完成すれば、ポケットに強制収納。収納されればアイテムや食料の劣化は止まる。

なんで劣化が止まるかは、ゲームだから考えない。

なんで焼けてるかは、出来立てホヤホヤだから。

手に伝わる温度からして大火傷必至。なのになんで平気か。

だってこのキャラクターはマグマに突っ込んでも地形ダメージ無効ですいすい泳げますもん。

「パンうめえ。すっごいうまいんだけど」

実験と朝食を兼ねて食べたけど、胃袋の大きさはリアル準拠らしい。

余った分を戻そうとして……かじったところを綺麗に割いて、テーブルの空いているプレートに乗せた。
使用回数１のデニッシュパン。ＨＰを３００回復。ＭＰを１５０回復。満腹度を５０回復。
人間種、少女キャラ最大満腹度は１００。使用回数１のパンを６口だけ食べて、満腹。
アイテムの使用回数は使用者のリアル満腹指数に左右される。
ＨＰとかの回復は全くの不明。あー、うまかったーによる幸福度指数とか、そういうのありそう。
次に確認すべきは、現在地である。同時に、リアル準拠のステータスに、非常に嫌な予感がしたのでソレの確認。
埃一つ無い窓の縁に手を掛け、おそるおそる引き開ける。
窓を綺麗にすっぽり覆いかぶさる木枠の滑らかさにうっとりして、頬ずりしたくなるけど我慢。
人工木材と違って、なんなんだろうこの温かさは。
差し込む日の光にびくびくしながら、手を光に当てる。
網膜に刺さる光。
真っ白な肌が、光を反射して宝石のように輝く。

自分の体なのに、あまりの美しさに息を呑む。
二次元の女の子みたく、息を呑むような女の子になりたいなー。
そんな夢が、まさか叶ってしまうなんて。
しかも、アルビノの弱点も克服。
あくまで、ゲーム内のキャラクターという物体がここにいるのであって、リアルの私の体という物体は一切関係ない。
でも、リアルの感覚が引き継がれているようで、ところどころで名残がある。
肌に当たる柔らかな温かみのある日光。
ほわあん、と意識まで暖まる。
思わず口元が緩む。
窓を開け放ち、小さな体を窓枠に乗せて身を乗り出す。
気持ちを和らげ、眠気を誘う暖かな陽光に導かれる。

「なにこれ！　これが、これが世界!?」

目に飛び込んだのは、巨大な王宮の一角。
その先に、先の見えない広大な平原と、日光を反射する湖が見える。

湖の近くには写真でしか見たことのないヨーロッパの古めかしい洋館がずらりと並んでいる。

中世の貴族達が優雅に歩く様を惚けて眺めていると、視界に移る王宮の部屋――の窓が急に開いた。

窓から顔を出したのは、掃除用具を持っている白と黒を基調とした、言うまでもない。

メイドと聞いたら誰もが思い描く白と黒のゴスロリ……じゃなくて、純粋真っ当な方のメイド服に身を纏った金髪の綺麗な女性だった。

びっくりした顔が、私を見てさらに仰天。目をひん剥いて、大慌てで顔を引っ込めてしまった。

窓開けっ放しですよー、なんて声が虚しく響く。

しばらくして、ドタドタという慌しい足音が隣の区画から響いてくる。

隣の区画？

いや、待て待て。

そもそも、さっき貴族風の人達を眺めてたけど、余裕で４キロ近く離れてる地点ですよね？

なんなんだ、この知覚能力は。なんなんだ、この超人っぷりに思わすこみ上げる優越感は！

目が使えないだけあって、元からそういう感覚神経は普通の人より敏感だったけれど、敏感とかどうとかいう次元じゃない。

おかげで感情を押さえ込んだ社長令嬢モードから、感情が高まると出てくる素に戻っちゃったよ！

慌しい足音から一転。厳かなノックが室内に響く。

そこで私の有頂天状態が少しだけ緩和される。

何も分かってない状態だけれど、今は社長令嬢としての振る舞いが一番効果的だろう。

ただ、自分の立場がいかほどのものなのかが分からない以上は――

自室でもないここで、どうぞお入りください、などと言う訳にもいかない。

当たり障りなく、ノックに対する応答だけにしておこう。

左手で喉をもみもみ。ちょっとワンオクターブ上げての猫撫で声で返事しとこう。

「はい」

声かっわ!?

なにこの甘ったるいアニメ声！

自分で身もだえするわ、こんなん！
自分に興奮するとか、ただの変態さんだよ！

「お入りになってもよろしいでしょうか、美しく、尊い我らが天使よ」
「――は？」
「し、ししし っ、失礼しました!?　下賤な人間風情が天使様にお目通りを願うなど大罪に等しい！　ど、どうかお許しを！」

思わず低い声で、は？　と聞き返してしまった。
それに対する極端な返答に呆然とするばかり。
だがそれも一瞬。都合の悪いことは、都合の良い解釈で誤魔化せると看破する。
そして、地が出た時のドスが入った声は、割と底冷えすると学ぶ。
ああ。冴えてる。冴えてるよ私！
とんでもない異常事態だけど、自分が超人だと分かっているから心のゆとりがすごいよ！

「いいえ。そんなことを仰らずにお顔をお見せください。この私――」

あ。
天使って言ったよね。私って今天使なんだよね!?
プレイヤーネームはイザナだけど、イザナって天使いるの!? いないね、うん！
イザナ、イザナ――イザナギ！ 神話から引用！ それっぽい！ 即時採用！

「いや、人界に降り立って何も分からない私がこんな高慢な態度じゃダメですよね。
入って入って。早く私にあなたの顔を見せて。まだ一度も見たことのない。初めての人間の顔を」
「は、はっ！ 畏まりました。私のような下賤な人間の顔などお見苦しいでｓ――」

まあ、一番最初にメイド見たから初めてじゃないけどね！
バァーンッ！
いいからとっとと入れやー！
思いっきり扉をぶち開ける。
その物音を聞きつけ、至るところにある扉から使用人やら兵士やらなにやら色んな人達が廊下に飛び出し、皆が飛び出した姿勢で時が止まる。

慌しさが一転。
凍てつく冬の夜を思わせる静寂さを奏でる。
クリスマス・イヴの夜。華やかなクリスマスツリーの周りには誰１人として存在せず、どこかのホテルに行ったのだろうという究極の無の如く。
そこに、ぽつりと零れる。

「女神様だ――」
「女神様だ――」
「女神様――」
「なんとお美しい――」
「まるでこの世の美を全て凝縮されたかのような――」

小さな呟きがさざめきになって長い廻廊に響き出す。
廻廊に現れた者達は、通路の左右に整然と並び、手前の人間から順々に片膝を着き頭を下げていく。
さー、と波が引くように、目に入った全ての人間が胸に手を当て、片膝を着いていく。
打ち合わせも何もなしに、するべくする。

その一糸乱れぬ動きに、畏敬の念すら湧き上がった。
この人達は『天使』にそれだけの信仰を寄せていたのだ。
型破りの破天荒”天災”お嬢という褒め言葉とも侮辱とも取れる私のあだ名を思い出す。
天才じゃなくて、天災。

「あなた方の厚き信仰、しかと受け取りました。しかし、私ごとき——降り立ったばかりの身に余ります。顔を、いえ、お立ちになってください。
真の信仰を捧げるべき高位の存在はいくらでもいるでしょう。まだ何もしていない、ただの女子供ごときに、大の大人が頭を垂れるなど必要はありません」
「そ、そんなことは決して——」
「いいえ、そんなことがあるんです。今見せたように、私は礼儀も何も知らないただの下賤な女子供ですよ」

扉をノックした男は、恰幅の良い王様しかりとした人間だった。
豪華な服飾を控えた、それでいてはっきりと王だと伝わる厳格な雰囲気を携えている。

個人会社のふんぞり返った社長とは違う。中企業の常務を思わせる、現場と上を行き来した歴戦の男だ。
はっとしたように顔を上げたタイミングで手を差し出す。

「さあ、お立ちになって。何も知らない無知な私に貴方のことを。この世界のことを。そして、ここにいる素晴らしい方々のことを教えてください」
「な、なんとお心の広い――」

ざわざわと廻廊に戸惑いの声が響く。
もう、目じりにたっぷりと溜めた涙とかね。今、この場にいる人達の感情が全部丸分かりだ。
手に取るように分かるとはまさにこのこと。
これぐらいの感情の起伏なら、スキルとかなしに誰でも分かる。
自分で言うのもなんだけれど。
我ら下賤な人間ごときに、天使様がー。
お美しい姿の通り、心までもがー。
なんと慈悲深いー。などなど。

どんだけ評価高いの!?
ちんちくりんだよね!?
モデル体系の母性丸出しおっぱいぶるんぶるんの美女でもなんでもないんだよ!?
というか、いい加減に情報まるで無しで演技し続けるのはきっついので何か喋ってください！
その口でぼろぼろ情報を垂れ流してください！

「――ああ、そういえばまだ名を名乗っていませんでした」

口に指を当て、わざとらしい仕草を取る。
きもいとか言われてもおかしくはないのに、おお、などと感嘆の声が出るのはいったいなぜ。
しかも、今更だけど、天使なのに黒い服装なんですよね。
白要素なんて髪と肌だけです。
しかも、知識で持っている限りでは、この時代でこんな女としての体を見せ付ける服装はアウトだったような？
マイクロスカートの正面以外を隠す外套を摘み、小さく持ち上げる。

ゆっくりと、小さく頭を下げる。

「名乗る位もない、矮小な天使――イザナギと申します。皆さん、気軽にイザナとお呼びくださいませ」

００２．魔神な天使

あっという間に過ぎ去った一日に、安堵の息を漏らす。
そして喜びの笑みが浮かぶ。

「なんの儀式もなく、王宮の狩猟管理地に忽然と天使が舞い降りたと聞いた時は、何をバカなと思いもしたが――」

今日一日の出来事を話せと言われれば一日中語り続けられる自信がある。
まず、一報を受けて裏手の森林の赴いた時の、天使様の、いや女神様か？　ええい、あのお美しさといったらなんなんだ！
神だ！　もはや神である！　私が言うのだ、信仰の関係もあるし、神と――女神様と呼ぼう！
木漏れ日が差す森林の中。
一際大きな霊樹の幹に身を預け、儚く消えそうな寝息を立てる姿の美しきこと、愛く

るしきこと、あの瞬間、自身が愛する息子さえも愛おしさが超えてしまった！
イザナギと名乗った美しくも愛らしい少女の姿をした女神様の周りには、森に住む小動物や鳥、昆虫までも集まり、一緒に睡眠を楽しむ姿の神々しさ！
神の楽園に住まう者は、等しくこのような神々しさを自然に発しているのだろうと無知ながらにも理解した。
かと思えば、無邪気な子供のように思うがままに、一心に御心を表現なさる純粋無垢さ。
さらには天上の世界に住まう神々の厳かな雰囲気さえも携え、畏敬の念を敏感に察知し、慈愛のお言葉をお掛けくださる寛容な御心。
遊びに薄汚れた子供が女神様を見て抱き付こうとした瞬間には心臓が止まる思いだったが、まさか女神様自ら駆け寄り抱きかかえ可愛がるとは思いもしなかった。
そもそも外に出て人々と触れ合おうとするなんて思いもしなかった！
下賤な人間などと、卑屈な言葉を使おうものならば逆に咎められる、自ら一歩も二歩も三歩も身を引く寛大さ。
相手も身を引けば、大きく踏み出し、その手を掴んで引きすぎないよう咎める。
広場では民衆と４時間も語り合い、その御心の教えを説き、多くの者の心をお救いになられた。

しかし、救いの言葉だけではなく、己も気付かぬ『心の鎖』という枷を断つための叱咤もあった。

今日一日で私は12回も咎められた。

中でも一番心に響いた言葉がある。

人は自分の意見を主張し続ける。けれども貴方は、王でありながら一歩身を引くことを知るお方です。

ですから、親愛する貴方のためにと下の者達は一歩も二歩も身を引くのです。

一歩身を引き、視点を変えるということは、見える世界も変わるということ。

その相手を取り巻く環境さえも見えてくるでしょう。

そうやってお互いを敬い合えるのですから、こんな素晴らしい国がある。

だから私はここに導かれたのでしょう。

貴方は賢い。ですが、賢すぎる嫌いがあります。

相手が一歩引いたなら、自分が上に立つ人間であろうと高慢にならず、さらに引いて敬います。相手はそれを見てさらに下がります。

そのままでは身を引いて相手を見るどころか、相手が見えなくなってしまいますよ？

私は今日、１２度も貴方を咎めました。私は今日、何度も身を引く貴方に３８度も一歩近付きました。

離れすぎては埋めることの困難な溝を生み出すでしょう。一歩踏み込むことは決して無礼ではありません。

自分の方が下だからと身を引く者の止めたくても止められない足を、貴方自らが止めて上げてください。救って差し上げなさい。

むしろ、分かっているはずなのにそうさせ、下のものを先に一歩踏み出させようとするのは美学でもなんでもない、押し付けです。

ですから、私自ら何度も示したのです。

「遥か高貴な存在でありながらも、決して驕りもせず、我ら人間と、平民と同じ視点をお持ちくださる。いったい――」

――いかなる天使なのだろうか。

それに答えるように、扉がノックされた。

目をやると、メイドが扉に向かい応対するところだった。

声をかけ、静止させる。

予定よりも随分とかかったようだが、ようやく神官長が来たようだ。

「待ちわびたぞ！　ケネル神官長殿！」

「おお、久しぶりだな。ローグスよ。その堅苦しい呼び方はやめてくれと言っているじゃないか！」

肩を抱き合い、お互いの背中を叩き合う。

若かりし時に共に世界を歩み、この王国の危機を遠ざけた尊き仲間である。

今となっては、他の3人はすでにいなくなってしまったが……私と彼は、まだまだこの国の行く末を見守らなければならない義務がある。

それを祝福するかのように、今日、この日。

未だかつて、人類が出会ったこともない天使が降臨なされた。

貴重な伝言魔法のスクロールを使用し真っ先に連絡を取ったのが、王国屈指の水の神官であり、友人であるこのケネルなのだ。

非常に失礼ではあるが、このローグス王国を領地として持つリ・エスティーゼ王国は神官などの魔法の力を持つ者達を軽く見る傾向にある。

なにをバカなことをと思っていたが、おかげですぐにケネルを呼ぶことができたの

だ。
薄情者の自分に恥じる。
友人に心の中で深く謝罪し、感謝し、その言葉の変わりに自ら席を立ち、友を座るよう促す。

「さっそくで申し訳ないのだが、まずは事の経緯を話すとしよう。
できればお目通りをお願いしたいところなのだが、天使様は早くも床についてしまわれたのでな」
「天使様が、睡眠を？」
「まあまあまあ、その辺りも含めて話すとしよう。ちと、長くなるかもしれんがな」

ケネルが到着したのは、日が落ちてすぐの頃だった。
イザナギと名乗った天使様の姿形や、今日一日の振る舞いを話し終えた頃には、薄っすらと外が明るくなり始めていた。
隣の小国に馳せ参じたとはいえ、本来ならば２日かかるところをその半分にも満たない時間で彼はやってきた。
もう十分な年であり、疲労も相当溜まっているはずだったが、目を一切逸らすことな

く、若かりし頃と変わらないギラギラと輝く瞳を向けていた。

まずは、天使様の容姿である。記憶に焼き付いたその姿は、目を閉じれば生の感覚そのままに思い浮かべられる。

貴族でもあまり目にしない装飾の乏しい簡素なゴシックな黒のドレスを纏う。

小さく華奢な肩を覆うように、いかほどの達人が編んだのか、ひとつひとつに細やかな刺繍が施されたフリルをふんだんに使ったケープが柔らかく載っていた。

そのケープを首元の大きめのリボンで留めている。見た目相応、少女が好む桃色の大きなリボンである。

細い腰をより魅せるコルセット。黒の小さなフリルで縁どられ、体型に合わせるための調節紐は一本一本は色の異なる3本の暗色の糸で編まれたもの。

コルセットと下衣の極端に短いスカートの接ぎ部を隠すように、刺繍とフリルがこれでもかとふんだんに施された大きな帯を巻いている。

腰の脇にちょこんと配され巨大なリボンを作り、地に垂れんばかりの長い帯足を流す。

巨大なリボンは少女の色を濃く醸し出しながらも、穏やかに揺れる様は気品を示す。

言葉として今だかつて表されたことのない、少女さを残しながらも大人の質へと引き

上げる別次元の美。
だが、落ち着きがありながらも前衛で攻撃的な服のデザインが変貌する。
何を血迷ったか、常識では考えられないほど短い、破廉恥このうえない『股丈』というスカートを履いている。
正面を除く外周は、特に着飾っていない無骨な外套で隠されている。
つまり、わざと股下と白く艶かしい太股を見せ付けているのだ。
ちょっとでも風を浴びれば、同じ背丈のものであればひょんなことであられもない股間を覗けてしまうだろう。
そんな極限危険地帯であるが、男にいったいどんな怨みでもあるのか、太股の付け根に近いところまで桃色と黒色のぴっちりとした長い靴下で覆っているのだ。
ほんの僅かに沈んだ若々しく、瑞々しそうな肌は一番際どいラインだけ見せ付けられ、すらりと長い脚は全て隠されている。
かと思えば、極限危険地帯のすぐ真上には、防御力皆無の黒いヴェールに隠された誰も見たことのないような楽園でもあるのかと――げほん。
あまりにも熱く語りすぎた。
男子が始めて異性に興味を持ち始め、恋心、女に強烈な想いを抱く頃。
そんな年頃の少女が着用できるわけがない、大人だけが持つ肢体を引き立たせる服

飾。

しかし、それは大人の女性の姿に合わせて見繕われたもので、決して少女が手に入れられるものでも、授けられるものではない。

考え至れば、このように途轍もない美を得られたかもしれない。

なのに、潜在的な何かが『神の領域』を汚してはならぬと、誰もが夢想すらしなかった究極の服飾。

最後を飾るのは、小さな靴などではなく、膝下まで覆う黒の柔らかな布製のロングブーツ。

これだけ鮮烈に攻撃してきたかと思えば、最後を飾るのはあくまでも上質さを唱える無骨なもの。

「熱く語りすぎた。まだ、天使様の外装の話だけなのにな」

「いや、いい。私も大変興味深い。懐かしいな。何かしらあれば競い、優劣を付け、どちらが彼女を嫁に迎えるかと成人するまで争っていたな」

「まあ、結局。なんの身分もない強くもない優秀でもない、平凡な男に奪われ……いや、我らの想いが彼女にとっては重すぎたのだろう。完全な敗北を期したな」

それ以降、燃えるような恋心はなりを潜めた。
粛々と物事を見据えるようになってからというものの、現在の一国の王にまで至るほどの慧眼を得てしまった。
人は、恋すれば変わる。変わりたくば、恋をせよ。
そして、失敗は人をさらに変える。
己の精神次第では我々のように飛躍的に成長するが、道を外れ堕落するものだっている。
女とは、それだけ男にとって掛け替えのない、たった一人だけ所有を認められた天からの回し者なのである。
だからこそ、苦悶の声が漏れる。
私程度の人生を歩んだものでは、かの天使様の……まさに思いつくままの美を絵に描いた『絵空事』のままの美貌をどう表現すればいいのか分からない。
まだ、外装程度であれば嗜みもあるし表現は可能だ。
だが、私の知る絶世の美女や、かつて恋した、王族すらも手を引きたがる美少女さえも、花瓶に入れられ飾られる花の脇に見せしめとして晒され踏み躙られた雑草にしかならないのだ。
比較対象すらならない。

そもそも比較検討する時点で失礼にもほどがあるという別次元。天上の存在。
いったいどこが礼儀のかけらもない下賤で名乗る位もない、矮小な天使なのだと大声を張り上げて抗議を申し立てたい。

「すまぬ。肝心な容姿そのものであるが、神の領域にある美を私ごときがどれだけ伝えられるものか……全く自信がない」
「お前ほど女を見たきた者が他にいるか。そのお前が……言葉を見つけられないのか」

なんとか、ぽつりと言葉を搾り出す。
……今は亡き娘の部屋の扉を、荒々しく開け放ったあの瞬間を思い出す。
幼さが色濃く薫る小さな鼻に、突つけばぷるんとふるえそうな、女が羞恥に頬を染めた扇情的な淡い桃色の唇。
あまりにも出来過ぎた端正な顔立ちは、美少女というよりも、小ささと愛らしさから文字通り『人形』と言った方がしっくりくる。
黒を基調とする静かながらも厳格かつ煽情的なゴシックドレスに包むと、まさしく『人形』。

王宮の入り口に彫像として飾られていれば、生きていることを忘れ、独立した世界に引きずり込まれるだろう。
――だが、それを戒めるように。
――女の扇情に駆られ、肉欲のままに近寄れば射殺す。
雪景色のごとく冷ややかで、病的なまでに白い肌に薄っすらとかかる神秘のヴェール。
鼻先までも覆う長い白金の前髪。
神々しいヴェールの奥底で、見るものの心臓を鷲づかみにする紅の至宝。
燃え盛る太陽のような、熱く決断的な天使様のご意思そのものを見る者に与える瞳。
しかし、時に見せる怒りを知れば、それは燃え盛る怒りの片鱗とも、押し固めた鮮烈な殺意から生まれた宝玉にも見えた。
小さな口から時折覗く八重歯も、可愛らしいと言えば可愛らしいが、引き抜かれ切っ先を突きつけた刀身にも見えるだろう。
無知のまま無遠慮に近付けば八つ裂きにされる錯覚を見る。
美しい華には棘がある。
至高の宝玉には、僅かな傷さえも許されない。
触れた瞬間に砕け散ってしまうという緊張感を持って触れなければ、何か神罰を受け

てしまうのでは？

いったい如何様な天使様かは不明である。

パッと味では飾り気のない簡素な服飾に身を包むが、見る者が見ればその洗練された衣装に畏怖すら抱く。

ましてや、それらの風貌もあり。

黒と白。相反するものの互いが互いを引き立て合う。

どちらかが少しでも見劣りすれば一瞬でバランスが崩壊し歪なものとなるだろう。

子供でありながらも、大人のように締まった肢体。軽やかな尻にまで及ぶ長い髪。

可愛がり、守りたくもなる華奢な少女かと思えば、年を重ねて知と美を得た大人の女性を思わせる佇まいであり、触れればこちらの身が傷つきかねない雰囲気さえ漂う。

未だかつて見たこともない、広く一般的な『金色』の髪と対をなす『白金』の長髪。

陽光を浴び光り輝く細くきめ細かい宝石細工のごとき長髪が風を浴び、絡まることなくふわりと凪いだ姿は今でも鮮明に思い浮かべられる。

あれほどまでに洗練された美を飾るためには、宝石すらも見劣りしてしまう。

だからこそ、天使様本人を宝石として見立て、衣服は一切の装飾を廃し下地という一点の役目だけを追求したのであろう。

そして、最大の宝石である黄金に光輝く巨大な翼。

翼ひとつは天使様そのものと同じか、それ以上の巨大さである。
しかして、人が思い描くギラギラの黄金ではない。
例えるなら、雲を着き抜け大地に降り注ぐ瞬光であろう。
意識が覚醒し、まだ覚醒しきれていない脳と目が一時だけ見せる、滲んだ光の帯。
目を開き、瞬きするまでの、本当に一瞬だけ見れる世界が光に覆われている神秘的な光景。――それに似た光の差し方から、しゅんこう。瞬光と呼ばれる光景である。
ただ、誰しもがこの光景を何度も無意識に知らぬ間に見ているがため、とある有名な詩人がそれを言い表すまで言葉として存在しなかった新しい言葉である。
……リ・エスティーゼ王国の第三王女。
ラナー・ティエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフ。
金の髪に象徴される国内外にも知られる美貌と、王国の強化に繋がる画期的な施策を立案する頭の回転の良さ、精神の輝きの両面を讃えて『黄金』の二つ名で知られる王女である。
黄金のラナー。
彼女が初めて民衆に姿を御見せになられた時、言い表すに相応しい言葉がないと嘆かれた場で詩人に紡がれた最大の賛美の言葉である。
聴衆の場では、誰もが「何を言っているんだ、こいつは」と静かながらも、意味不明

な言葉を発する無礼を嘲笑う顔や視線、呟きに満ちていたという。
だが、ラナー本人の一言で全ては覆った。
「私は今でも貴方が語る、まどろみの中の光輝く世界をゆっくりと堪能してから一日を迎えます。
毎日見ているがために、当たり前と日常化し色褪せて逝く世界がその時だけ本当の姿を見せてくれるのです。
まさか、このような場でその想いを共有できる方と出会えるなどと思い願っても叶えられませんでした。是非、一緒に素晴らしき世界を語り合いたいものです」
詩人は、栄誉ある『黄昏の詩人』の称号を授けられ、方々から声がかけられる偉人として、今も現役の詩人として仕事をしている。
ただ、どうして『黄昏』の名を授けられたかは当の2人にしか分かっていない。
『黄昏』とは、一日のうち日没直後。雲のない西の空に夕焼けの名残りの、網膜に突き刺さる朱が残る時間帯である。
それが失われて藍色の空が広がると、人が消え、魔が這びこおる時間帯に入る。
決して名誉として使う時間帯の言葉ではない。
黄金のラナーにちなんで『黄金の詩人』や『陽光』『朝日』『光輝』ならば分かる。
なぜ、魔が差す寸前の刻を取ったのか。

黄金のラナーが詩人を危険視する暗喩などと邪推も行われたが、そんな怪しげな雰囲気や行動もない。
謎に包まれたままであった。

そんな詩人が遺った言葉でようやく、天使様の黄金の翼の形容しがたい神々しさを僅かに物語れる程度。
かの瞬光のごとき、淡い光が滲む黄金。
陽光を増幅し、輝きを増し、より一層眩い光を放つ。
白と黒。未熟と成熟。それらの素晴らしさを象徴とするような後光のごとき翼。

人の言葉による賛美は侮蔑にしかならない。
『神域の美』と、そう讃える以外に他ない。
しかし、あまりにも出来すぎた美貌というのは、逆に『おかしい』『気持ち悪い』と感じてしまうのはいったいなぜだろうか。
完璧であるがゆえに、妬むのか。
己が決して至れず、触れることもできない存在を、無理にでも下級に陥れ、己でも手が届くのだという自己暗示であろうか？

ただ、明確な答えは知らない。
なにせ、人類がそのような場面に遭遇したのが今日はじめてなのだから。
そうでなければ、かの天使様すらも恥じらい身を揺らす言葉があって然るべき。

なんとか天使様の美を失礼なく伝えられた感触に、満足の吐息を漏らす。
あの御姿を脳裏に思い浮かべるだけで、至福の時を何時間も味わっていたかのようである。
ケネルは目を閉じ、伝えられた姿を自分の知識で思い描いている。
ただ、どれだけの美に美を重ねて想像したところで、実際に目の当たりにすれば魂が下から抜けるような気分を味わうだろう。
一度でも神域の美を知れば、人間程度の頭で想像する美がどれほど矮小で嘲笑の的であるかが分かる。
自分も、今日までそうだったのだから。

「なんと。銀の飴細工を思わせる白銀の長髪に、陽光を浴び輝く白雪のごとき絹肌の少女の姿をした天使様だというのか。
翼は日輪の柔らかくも眩しい金……と。人の姿をし、人と同じく話し、同等の者とし

て接する天使様など見たことも聞いたこともない」
「そう、か……神官ちょ――ケネルでも知らないのか。私はその辺りに疎くてな。他の天使様すら見たことがないのだ」

言うと、ケネルは手を差し出した。
長年の付き合いから、意図を理解する。
『思考連結』――マインド・リンク。
使用者が思い描く事柄を対象者に伝える神官魔法である。
口にすることが憚れる事柄などを何者にも盗聴されることも言質を取られることもない必須魔法……らしい。
マインド・リンクを通して、ケネルから天使様の姿が伝達される。

「これが……天使様だというのか？」
「そうだ。天使様と言うには、少し憚れるがね。スレイン法国のマジックキャスター達はこの天使達を召喚し、使役することができるそうだ。ただのモンスターと言っても差し支えない」
「なんと!?」

「中には、かつて魔神をも滅ぼしたとされる最高位天使がいるという噂も聞く」

魔神を、滅ぼした？　魔神をも滅ぼした最高位天使が人に使役できるのだろうか？　そもそも天使とは、人々の信仰に応え、御姿を見せることがあるだけではなかったのか？

だが、その最高位天使ですらも、人の姿ではないと言う。

「これでも神官であるからね。深くは――語れない。しかし、基本的には信仰するモノに対する殉教心が我々を助ける力となるのだ。

天使様のためにと思えばこそ、尊き天使様がひとつの御使いを使えさせて頂けるのだと。そう解釈して問題はないだろう。現に、そうして使役されているのだからな」

ただし。

マインド・リンクを通して、ケネルは油断ならない険しい顔で告げた。

「スレイン法国がエ・ランテル近郊の村を襲ったそうだ。しかも、天使を複数引き連れてだ。真に信ずるべきは、同じ人の心であり、神や天使ではない」

「……だが、自然は普遍であろう？」

言うと、ケネルは薄っすらと笑みを浮かべる。

話は終わりだと言わんばかりに、ケネルは立ち上がる。

要するに、現れた天使は正体不明。天使ならば全て良しではなく、使い手や本人の心を汲まねば聖邪のどちらにも転ぶのだと。

聖邪は、善悪は一人一人の価値観に左右される。

神官であるケネルが言う言葉を是とだけ捉えるのではなく、自分の目で見て、自分の心で考えて、物事を判断せねばならない。

固定観念を捨てよ。

それは、生半可なことではない。

「――しかし、善悪を決めるのは後世であり、今の私達ではない。善悪も大事ではあるけれど、己の信念を貫き、迷いなく決断することが最も正しい」

「んなっ!?」

「て、天使さ――イザナギ様!!」

突如、書斎に響き渡る凛とも可憐でもある華やかな声。
静寂の中に声が透き通っていく。
澱みのない声が紡ぐ言葉は、聖邪善悪を覆す冒涜とも受け取れる決定的な断言。
されど、それを否定する言葉は全く浮かび上がらない。
その発言はよろしくない。なぜ？
善悪も関係なし、己の信念こそが是であれば悪がまかり通るからだ。なぜ？
一瞬にして清濁の奔流に飲まれる我々を、審判を下すがごとく見下ろす天使の姿を仰ぎ見た。
２階の手すり部分に腰を下ろし、脚を組み、頬杖を付きながら笑みを浮かべる姿は――愛くるしい外見とは裏腹に、凶悪な悪魔を彷彿とさせた。
決まりかけた聖邪善悪を瓦解させ、泥沼に陥れた言葉はまさしく悪魔の囁き。
純潔を示す白き体を覆う、妖しくも魅惑的な黒い外装はイザナギ様の本質を語っていた。
大きくくりくりとした可愛らしい瞳が、今や獰猛な獣のように獲物を捕らえて離さない。
心臓を、直接握り締められているような重圧に、膝が砕ける。
血のような。あるいは怒りのような。はたまた殺気を押し固めたかのような紅玉髄

の双眸。
その縦に裂けた瞳孔に、どうして今まで気付かなかったのか。
これではまるで――
「魔神ではないか、ですか？」
「っ――!?」
先ほどからずっと心を読まれている。
横目でケネルを見ると、心臓を押さえ、片膝を着いてぜえぜえと肩で息をしていた。
いや、ケネルだけではない。私もだ。
今この瞬間、彼女の機嫌を損ねれば即座に命が費えるであろう確信。
そこまで考え至っていることさえ理解し、彼女は満面の笑みを浮かべていた。
人を屈させるほどの圧迫感を与えてなお、イザナギ様はまだまだ余裕を見せていた。
「言ったでしょう？　貴方は賢いと。賢いのだから、私に一歩踏み入れなさい」
その言葉は、まさに悪魔の囁きのように耳を通り脳に直接浸透した。

捉え様によっては、魔神のごとき重圧を放つ彼女の隷属になれ、とも聞こえる。
拒否権などなし。問答無用で配下に加われ。でなければ殺す、とでも。
迷い無く、重圧を撥ね退け一歩を踏み出そうと全身に力を入れる。

「よせ、ローグス！」
「いや、いいのだ。これが……正しい！」

全身全霊を振り絞り、下ろした脚を振り上げた。
書斎を揺るがすような踏み込みで、重圧を撥ね退け立ち上がる。
その姿に満足したのか。彼女は目を閉じ、ゆっくりと頷いた。
なんとなく、理解していたのかもしれない。
王である私と接していた者達は、ここまでとは言えないが、寿命を縮めかねない重圧に襲われていたのではと。
相手の気持ちを理解するには、相手の立場になること。
それが出来れば苦労はしない。
だから、生半可な努力でどうこうできるものではない。

「ふふっ。どうです？　遥か天上の者と相対する気分は。あることないこと、いーっぱい考えませんでした？」
「全てを見通し、本来見えるはずもない心までも看破する慧眼――いや、神眼。感服いたします。そして、感謝いたします」

何が起きたか理解していないケネルは唖然としたまま私と彼女を交互に見比べる。
書斎を異界へと変貌させていた重圧はすでにない。
天使様は、頬杖を着いたまま屈託のない笑顔で、脚をぱたぱたと動かしている。

「でもでも、私のことをひそひそと噂するからいけないんですよ。陰口とか言われてたら、悲しいじゃないですか。
でも、まあ。私が変なことをする前までは、ローグスさんはしっかりと私を信用してくれてましたからね。嬉しいです」
「身に余るお言葉。ありがたく頂戴いたします。以後、天使様のことを語るような場であれば、お声をかけ、ご同伴くださるようお願いいたします」
「今回は私も寝てたし、私が悪いんですからそんなに畏まらないでください。言ったでしょう？　イザナと気軽に声をかけてくださいって」

ほっ、と小さな掛け声と共に天使様が降り立つ。勢いでスカートが捲れて小さく可愛らしいお臍まで見えるという非常にはしたない行為であるが、身の危険を感じたので指摘はしなかった。

決して、指摘するとその素晴らしき御み足を拝見できなくなるのではないかという考えではない。決して。

金の刺繍で縁取られた赤色のカーペットの上に、遅れて零れる黄金の羽毛。

天使様の位が明らかになれば、羽毛ひとつ取っても恐ろしいまでのマジックアイテムになりかねない。

いや、頭の中で思いを馳せる時も、出来うる限りは天使様でなく、彼女やイザナギ様と呼ぶことにしよう。

普段から気を付けなければ、彼女が一番望む互いの立場にならないのだ。

そんな思考も敏感に察知したのか、愛くるしい、文字通り天使のような微笑を浮かべた。

無礼にもほどがあるが、あまりの愛くるしさに股間が身じろぎする。

誤魔化すように背を向け、書斎の中心に座するテーブルの上座に彼女を誘導する。

彼女の背丈からすると大きい椅子。

手を出し出すと、彼女は小さな手を置き、私の手をそっと握り締めた。
ぐっと力が込められ、見た目以上に軽い体重の一部が手に加わる。
軽く引き上げるように少女の体を持ち上げる。
ふわりと軽やかに椅子に座す。靡く長髪。頬を掠める芳醇な少女の薫りと、柔らかな感触。
ただ座るだけなのに。決して上品とは言えないはずなのに。どうしてこんなにも気品が溢れ出るのか。
美しい横顔を拝顔し、対面に座する。
ケネルは一瞬迷うが、私と少し距離を開けて隣に座った。

「そもそも、私の家でもなんでもない。しかも無条件で住まわせてもらうのですから、非常に申し訳ないんですけどね」

一番初めに口を開いたのは、イザナギ様だった。
こうやって、堅苦しさを消そうと気軽な声色で語りかけてくださる。
幾分か慣れてきているので、相槌を打つ程度に抑えるよう心がける。
ケネルは自分の想像する天使像とのギャップと戦っており、まだどのような問いを投

げかけるか悩んでいるようだ。
懐の深さを考えれば、大概のことを許してくれるだろうが、相手が相手だけに深く考えてしまうのが普通の反応だ。

「ですので、私でも出来ることをしたいのです。そのためには、最大の権力者であり支持者であるローグス王の協力が不可欠。
どうか、貴方のお力をお貸しいただきたい。私に出来るのは貴方に感謝し貢献し、私の存在を証明し、この素晴らしい王国を今よりも磐石にし、発展させること」
「イザナギ様自らそのようなお言葉を頂けるとは。王国に住まう貴族、民もお喜びになるでしょう。今はこの私ローグスが代わりに御礼を申し上げます。
御身の偉大さはすでに街中に知れ渡っています。私の権限がそれほどの影響を与えるとは思えませんが、民衆はすぐにでも御身のために尽力することでしょう」

一つの方針が決まったところで、イザナギ様がちらりとケネルを見た。
とうとう来たか！　そんなケネルの内心の叫びが手に取るように伝わった。
すっと席を立ち、ケネルが一歩身を引く。全身がイザナギ様に見えるよう配慮したのだ。

「二度目となりますが、我々の国の説明も含め、彼の紹介をさせてください。
彼は本国――リ・エスティーゼ王国の王都から派遣された王国屈指の水の神官長ケネル・ウェンディ・リ・ドメイン」
「紹介に預かりました。リ・エスティーゼ王国、水の神官長ケネル・ウェンディ・リ・ドメインにございます。
まずは先ほどの無礼を――ありがとうございます。この度は、ローグス王からの依頼ならびに本国の王からの命令で御身のご確認に参りました」
イザナギ様はケネルの謝罪を一蹴。私自ら非礼を行ったのだから、貴方が非を感じる必要はないと。
「私の確認というのは？」
「はい。我が国において天使様の光臨は歴史上初と言えるでしょう。諸手を挙げて喜びたいところですが、信仰心の厚いスレイン法国を差し置いてなぜ我が国にとの戸惑いが強いようです」

イザナギ様の機嫌を損ねぬようにケネルは慎重に言葉を選んでいるようだった。
矮小な人間としては、失礼とは分かっていても強大な力を持つイザナギ様を警戒してしまうのだと。
イザナギ様の存在を疑っているのではなく、少しでも未知の恐怖をやわらげるために調査してしまうのは人間の本能であると。
ただの平民どころか、王も神官長も混乱するのだから本国が混乱するのは当然だ。
これほどの事態となれば現国王が自らおいでになられるべきなのだが――イザナギ様に隠し事は通用しないと踏んだのだろう。
国王に泥が被らぬよう、それとなしに国王が身に置かれる立場を説明し、非礼を詫びた。

「いえいえ、全然構いません。むしろ、来ていただかなくて助かりました。国王まで来たらプレッシャーのあまり失禁してしまいます。
礼儀の欠片もございませんし、笑いものにでもされたら泣いて一生山に引き篭もって過ごすことになってしまいます。天使の名を失墜させたと滅されても文句は言えないでしょう」

本当にそう思っているのだろうか？

両手をひらひらとさせて謙遜しているように振舞っているが、先程の重圧を考えれば「国王ごときが来てなにすんの？　面倒くさいから、したいことさせて」の意にしか見えない。

てきとうな振る舞いが目に見えて多いが、今までのことを考えると――何も考えていないようで何十手先も読んでいるだろう。

あくまで、わざと無知を振舞って他の者に対してのプレッシャーを軽くしているのだ。

「まさかこの老いぼれが生きている間に天使様と相見えるなどとは思ってもいませんでした。ましてや、真――人の姿をした天使様など見たことも聞いたこともありませぬ」

「人の姿をした天使がいない？」

「御身は我らが知る世界とは異なる、遥か上位の存在だとお見受けします。なにせ我らが知る天使とは、言葉も交わせず、ただ命令に付き従う存在なのですから」

イザナギ様が机に肘を着き指先を口元に当てて思い悩む。

天使が同属の天使を知らないとはどういうことだろうか。

天使には天使の、干渉すら許されぬ一線を画する階級があるのだろうか。

「ちなみに、現在確認されている最上位の天使は誰でしょうか？　もしかすると知った仲かもしれません」

「今や神話の世界の話ですが……かつて、魔神をも一撃で葬ったと伝えられる最高位天使ドミオニオン・オーティリｔ――」

ゴガーン！　盛大な音を立てて、イザナギ様が頬杖から頭を滑らせて額をしたたかにテーブルに打ち付けた。

「はあっ!?　そんなゴミが最高位!?」

「はいぃ!?」

「ほぁっ!?」

「……――げほん。失礼。思わず汚い言葉を」

ゴミ!?

今、あの伝説の魔神を倒したドミニオンをゴミって言いませんでした!?

ぶつぶつと何事か呪詛のようなことを撒き散らしている。
最高位も何も低級だろ。あのくそやろう。警戒して損した。あのゴミで喜んでるくらいだし。
などなど、伝説に残る天使が口々に罵倒されていく。
どうやら、お知り合いらしいが……扱いのひどさから察するに、イザナギ様から見て遥か低級の存在らしい。
ぞわりと背筋が凍る。

「……この世界に来てからの皆さんの驚きぶりがどういうものなのか、十分に把握いたしました。
これ以上の混乱を避けるには、お二方には天界の最低限の知識を持っていただかなければなりません。でなければ、私がいちいち疲れてしまいます」

半開きの据わった視線が突きつけられ、思わず背筋がぴんと伸びる。
その瞳には、本物の天使も知らずにゴミごときの秤で我のことを計っていたのか、という憤りを通り越した呆れがあった。
返すべき言葉も見つからない。

ケネルと視線を交わすが、高位のものとよく目を合わせる彼でもどう対処すればいいのか分からないようだ。

「私に対していったい何を期待されて突然こんな世界に突き落とされたかは調査するしかありませんね。いずれはここを出ることになるでしょうから、それを念頭に置いておいてください」

「イザナギ様ほどの天使様が――何の命令をくだされていないんですか？」

「そうですよ？　当たり前でしょう。派遣先の調査も含め、全部ぶん投げです。何をすれば良いかも含め、全て自身の目で判断し処理する。

善悪の判断もつかない、何を成すべきかも分からない、必要とされるモノの分別を自分で付けられない天使など存在する価値もないでしょう」

故に、ドミニオンごときに対して与えられる仕事は『ゴミ掃除』程度。ゴミだそうだ。

ご、ゴミ……頭がくらくらしてきた。

嘘だ。嘘だと言って欲しい。

もしくは、本当にイザナギ様が超次元の存在であることを証明する何かを叩きつけて、我々の意識に変革をもたらして欲しい。

「とまあ、このように話すたびに己の正気を疑ってばかり話が進みません。ですので、とっとと視点を引き上げていただきましょう。
貴方方ですらこうなのですから、一般の民衆はこれ以上なのでしょう。――人間界では誰も知りえない情報の開示となります。くれぐれもお気をつけて」

とん、と天使様の指先がテーブルに突き立つ。
指先を中心に、書斎を埋め尽くす巨大な魔方陣が浮かび上がる。

「な、あな、なんなんじゃこりゃあああ!?」
「ちらっと耳にしましたが、この世界には全部で１０の位階魔法が認知されているんでしたっけ。その上に存在する第１超位魔法の秘匿魔法です」
「……」

驚きの限度を超えると、極端に冷静になるらしい。
なんだろう。もう、このお方なら「私は創造神です」と言ってもすんなり信じられる。
歯車のように幾重も重なり、２層、３層と魔方陣は展開されていく。

視覚化された魔法の理。
それが、己の体を突き抜けて何事もないかのように刻一刻と姿を変えながら歯車のように廻るのだ。
イザナギ様が目を閉じ、魔法詠唱とは異なる――自己へ、あるいは世界へと没頭し魔法を浸透させていく。
ここは、もはやただの世界ではなかった。
神話の世界の一端を見せ付けられ、人間の常識の壁が破壊された。
これだけの超常現象なのに、一切の魔力が感知できない。
真の魔法とは、魔力だけを振りまくのではない。
自己と世界を融合させ語り合い、交渉の果てに現象として引き起こされるのだと知った。
視界が白く染まる。
何層にも重なっていた魔方陣が突然の光の爆発とともに四方八方に飛び去っていく。
「もっと初めに使うべきでしたね。何者かが私達を偵察していたようです。
同じ超位魔法でこの部屋の魔法隔離が破壊されない限り、ここで語ることは誰にも知られることはありません……貴方方が話さない限りは」

それは遠まわしに死を突きつけているようなものだった。
ここまで来て、黙っている自信はありませんのでお断りします。などと言う選択肢はない。
重圧に重圧を重ねられ、喉はすでにカラカラに渇いている。
テーブルに水があるものの、イザナギ様が一口も飲んでいないのだから、我々が割きに飲むわけにもいかない。
厳かに頷いて喉の渇きを誤魔化す。
そうして天使様は語りだした。
この世界の上には、天上界『ユグドラシル』なるものがあり、そこにはそこの神々や天使、悪魔がいること。
下界と同じく１０位階の魔法はあるが、ほとんどの者は5位階魔法を最下位と見て、それ以上のものを扱うという。
超位魔法と呼ばれるものを扱える者は優に１０００を超え、お互いにその特性を把握しており、簡単に対処できてしまうのだという。
他にも、天上の世界でも国があり、領地を争い合うこともある。
争いの元となるのは、天上界基準である神の秘法である。全部で何百とあるらしい

が、至高の神々ですら易々と見つけられるものではない。
その中でもとんでもない力を発揮するものがあり、『二十』との言葉を聞けば至高のアイテムである最強各の２０個のアイテムであると誰もが知るそうだ。
で。
我々の物差しでは到底理解できない世界から、神々の尖兵であるイザナギ様が送り込まれた。
わざわざ下界に送り込まれた理由としては――

「私達の世界から邪神の一柱が降り立ったと考えるべきでしょう。であれば、すでに人々はその毒牙にかかっており、無意識の内に、何も思わず同属である人間を差別し嫌悪し、殺しあっているはずです」
「な、なんと……今まで何も思いませんでしたが、我々はすでに邪神の手にかかっていると言うのですか」
「王でしたっけ。その階級別けも邪神の魔法の影響でしょう。同じ人間でしょう？　母なる大地に等しく生れ落ちた赤ん坊でしょう？　なんの差があるというのですか」
「たしかに天使様の仰られる通り……むぐぅ。こうして言われるまで何とも思わない自然さこそが真の恐ろしさなのでしょうな」

天上界もまさにその状態なのだと言う。
ケネルと共に実感の湧かない悪の魔法の威力に唸る。
威力という威力は感じられない。突然魔性の者へと変貌するわけでもない。
これをいきなり邪悪な神の施した魔法と言われても、悪影響を感じられないのだ。
だからこそ、その邪神の巧妙な手口がおそろしいのだが。

「まあ、魔法なのか、二十に頼って発動した儀式かも分かりませんが、そうですね。昨日、私が言ったように人間が人間を憎み合う『負の連鎖』は始まっています。
『ダーク・スパイラル』とでも適当に名付けてしまいましょう。それが何年、何十年、はたまた何千年前に発動されたかは不明ですが、戦争が起こっていることを考えれば――」
「すでに、並々ならぬ影響を受けているわけですね」
「しかも、誰も疑問に思わぬほど意識に刷り込まれた……危険とすら感じぬまま人類が人類の手によって自滅する魔法」

邪神は、それにさえ気付かず破滅していく人間の姿を見るのがこの上ない興奮を覚え

るのだという。
愚かだとさえ気付かぬ愚の真骨頂。
他人のせいにして真の悪さえも、耄碌した目と頭で気付けぬまま同属に呪いを吐き、さらに増強された呪いを撒き散らす。
その積み重ねの結果、成仏すらできぬ怨霊が発生し、アンデッドや魔獣も蔓延る世界になってしまう。
最終的にどれだけ危険な魔物が存在しようと、それでも人同士の争いは絶えない世界となる。

「それだけではありません。こうやってまともな天使が派遣されたのが今の今です。
ドミニオンをゴミと。報告もできないゴミ掃除しかできない使えないやつと言った意味が分かるでしょう?」
「は、はあ……」

イザナギ様の言う邪神とは、敵対する聖なる天使達にさえその存在を悟られなかった隠密性を持つ。
そして日ごとには気付けない。年を重ねれば常習化し異常を異常とすら感じられな

くなる。
当たり前となれば、指摘されても「何を言っているんだこいつ」と逆に反感すら持つようになってしまう。
天使様に指摘されなければ気付くことのできない歪を、湖に一滴一滴泥を垂らすように綿密に計画を進めていく。
こうして天使様の一柱が光臨なさったのであれば、一思いに滅することが可能なのではないか？　そんな疑問は情け容赦なく切り伏せられる。
自分達よりも遥かに下等な存在であるのならば、とうの昔に滅ぼしていると。
聖と邪は互いに互いを滅する反属性同士。
むやみやたらに突撃しても、相手がいったいどこでどれだけの規模の軍勢となっているのかも分からない。
無駄な疲弊をしたところを突かれるぐらいならば、天使は天使で邪神によって汚染された地域や人々を浄化し勢力を増していくべきであると。
着実に規模を拡大しているのは、先程の超位魔法によって何者かの監視を弾き飛ばした時点で確定している。
昨日、今日で出現したばかりのイザナギ様を感知し、第８位階相当の諜報魔法を幾重にも張り巡らしていたという。

これで邪神軍に天使様の光臨は気付かれた。
邪神の動きが活発になり露見するか、今以上に慎重になって何百年何千年規模の水面下の戦争となるのか。
それらを大きく左右するのは、それを知った我々だと言う。
尤も、知る知らないは関係なく、この地に天使が光臨した時点で無関係ではいられない。
――この地は、天使が光臨できるほどの何かを秘める、守るべき拠点であり……攻め入られる弱点でもある。
これだけ重要であると話してくださったイザナギ様が、自身を鼻で笑った。
「ふふっ。存在するだけで国にとって害悪となり得る。天使とは悪魔と大差ない傍迷惑な存在でしょう?
いえ、悪と断じられる者と違って、仮にも人類の味方になり得るだけに、追い出したくても無碍にはできないのだから悪よりも性質が悪い」
「そ、そんなことはありませんとも！　私は……ケネルも同調してくれるようです。我々はイザナギ様のために尽くすと誓いましょう」
「――けれど、貴方方の決定に対し、民は諸手を挙げて私を支持すると人生を家族を投げ

打って戦ってくれるでしょうか？」

……そ、それは。

口ごもると同時に、そこまで我々のことを考えてくださるイザナギ様に、何度目とも分からぬ感謝の気持ちに包まれた。

「ですから、内部崩壊だけは回避したい。現状はこれらのことを伏せていただき、民達が自ずから私とはいったい何なのか知りたがった時にこそ真実を言うべきでしょう」

「天使様ほどの聡明な方がそう判断するのであれば、それに間違いはないでしょう」

「私から見てもイザナギ様の判断は遥か何年と先を見通した考えだと思います。しかしながら……ローグス王国だけの問題では済まされない」

されど、他の２大国家はおろか、本国ですらこの事態を重く見るのか危ういのが世情である。

悲しくも、イザナギ様の存在は我々でいう『御伽話』の世界をさらに超える『夢物語』か『空想』レベルの話なのだ。

「ローグス王が考えている通りでしょう。ですから、私は人類の意識を着実に高め、自らの名を一気に広げなければなりません。

笑い飛ばすような御伽噺を広め、一瞬で現実と成す。それには綿密な計画も必要ですし、人界の世情も知らねばなりません。改めて――」

至らぬ身ですが、御二方の力を貸していただきたい――言って、席を立ち我々の元まで歩み寄った。

差し出される少女の手。

見た目だけは少女なのだろう。

しかし、その小さな手と体に世界の命運が圧し掛かっているのだ。

――人間ごときに、イザナギ様が背負う重みをどれだけ軽減できるというのだろう。

ケネルと視線を交わす。

若かりし時と同じ決意の眼。

魔物が現れた王国を再び手中に治めんと、各地で研鑽を積み、遂に今のローグス王国を取り返したあの時のような。

今、目の前にいるのはたしかに強大すぎる天使なのかもしれない。

されど、同時に年端もいかない少女であることも事実。

「我々にできることは少ないかもしれません。ですが、なんなりとお申し付けください。全力で成し遂げて見せましょう」

私達の言葉を受け、天使様は私とケネルと丁寧な握手を交わし、演技などではない――本当の、少女の笑顔を見せた。

「よろしくお願いしますっ！」
「こ、こちらこそよろしくお願いしますとも！」
「天使様の御力になれるなど、このケネル冥利に尽きます！」

両足を揃えて、勢いよく礼をする姿は紛うことなき幼子のもの。
振り乱れた髪を整える少女の姿に、光が見えた。
あまりの神々しさか？
年端もいかぬ少女が背負う過酷な運命にか？
乱れる心が誘う涙の真意は分からなかったが、これだけは言える。
一人の人間として、全力で彼女を支えようと。

会談と言うべきか、会議と言うべきか。
三者の意思疎通も終わり、ようやく一息つく。
大部分はイザナギ様と我々人間の認識の違いの改め。そして人界のことを教えることだったが。

「さて、これで御二方は私のことを知る重要人物になってしまいました。何か聞かれても、自身は記憶操作でも喰らったのか、全然何も知りませんを貫いてください。
そしてなぜか私の身体的特徴や本名を知る者に関してはすぐにでも私と会わせるように。それ以外は従来通りの仕事をしてください。私はそのお手伝いをさせていただきましょう」
「それでは手筈通り、ローグス王国内ではイザナギ様の御心を広め、支持を集めることでよろしいでしょうか。まあ、すでに半分以上目的を達しているような気がしますけれど」
「……本国では、天使様も絶句するほどの堅物共に辟易するでしょうな。できれば入念な計画の上で帰還したいと思います。
本国に帰還してある程度のことまで話したら、天使様に必要とされているということ

でこちらに家族共々住まわせていただきたいのですが……」
「おお、ありがとうございます！　あそこの綺麗な湖を見て、水の神官長を天使が迎え入れたいと伝えれば一発ですかね!?　後日、話を詰めたいですね」

ケネルが唸る。
イザナギ様も言わんとすることを悟り、本国がそれほどまでにひどいのかと苦笑いする。
ケネルの言いたいことを大っぴらに言うとこうだ。
「国や民、貴族の関係などどうでもよく、自分さえ良ければ全てよし。悪しは全て言質で他人にぶん投げて我関せずでふんぞり返るクズとは一切関わりたくない」
イザナギ様がこの国に光臨したことで、私達にとって非常に都合が良い。
私達に都合が良いということは、総じて天使様にとっても都合が良くなる。
そうすると本国の貴族共の立場は一気に後退するため、彼らにとっては非常に不都合な存在となる。
互いの利益になり、不利益になるのであれば隠す必要がない。
もちろん、利益に限らず不利益の情報も全て開示し、３人で知恵を絞ればより良い解を得られるだろう。

尤も。イザナギ様の叡智だけで事足りてしまいそうなのだが。

「ありがとうございます。貴方ほどの王だからこそ、私はここに……運営もここを拠点とすべきと私を送り込んだのでしょう。

そして、本国の状態を憂いて、立場的にも柔軟な対応をしてくださるケネル神官長を巡り合わせてくれたのでしょう。正直、上はそんな崇高な頭の持ち主ではないので、単なる偶然――」

「――されど運命、ですかな。いえいえ、私ごときがどれほどの役に立てるかは存じ上げませんが、出来る限りのことはしましょう」

「言葉は捉え様によっては悪くなってしまいますが、天使様が光臨なさり私共は非常に助かっております。些細なことでもなんなりとお申し付けください」

どうしてこんなにも冷静に会話できているのだろうか。

相手は史上最高位天使。対等に居られるはずがないのに。

ふと疑問に思うが、それこそがイザナギ様の話術が成す業なのだろう。

初めに感じていた天上の存在と下賤な人間の溝はない。

それは当然だ。

イザナギ様は初めからそんなことを微塵も考えておられない。
初めから、このような関係になれることを望んで諭し、対等に接してくれるよう立ち振る舞ってくれたのだ。
……そもそも格が違うのだから、懸念する時間が無駄だと現実を突きつけられた気がしないでもないのだが。

「んー……ローグス王は非常に賢いので、私が振舞う演技の支援をしていただきましょう。付け焼刃のホラ吹きでも構いません。
勢いだけでも構いません。支援さえいただければ立ち振る舞い易いのです。民衆を騙すようですが、真実の意味では騙しでもなんでもないですから――」

「――だって、嘘ではないんですから」

片目を閉じ、人差し指をちろりと舐めてウィンク。
ぞわりと背筋に悪寒が奔った。
どうして、こう、見た目は幼いのに熟した貴族のような妖艶さを醸し出すのだろう。
わざとやっている硬さはなく、素でやっているのだから余計悪い。

魔性の美。妖艶。魅惑。これらは彼女のために用意された言葉に違いない。
ただ、できれば。できればだが、妻子もいるのだから男心を鷲掴みにして離さない誘惑的な言動は控えて欲しいものだ。

「ではではっ。さっそくですが内政に携わる者と使用人を最低１０人ほど。内政に磨きをかけるには、生活基盤の最下層から手がけるに限ります――が」

天使様が視線を左右に、上にと泳がせる。
何かあるのだろうかと目で追うが、特に何かあるわけでもない。

「その、前に。非常に図々しいお願いなんですが、その……」

顔を紅潮させ、俯いて小さく呟く。語尾にいたっては全く聞こえないほどか細い。
何とか湯浴みと聞き取れ、合点が行く。
風呂だ。
風呂という言葉を使わないのだから、なんだかんだ言って高貴な生まれであり、それに準じた言動が見受けられる。

こういう、控えめな女の仕草というか言動が危険なのだと思ってすぐにこれである。
無意識だから無理なんだろうけど――諦めの息を漏らす。
天使様の湯浴み。民衆からすれば女神様。そんな御方の湯浴みとなれば、さすがに男の出る幕はない。
指を鳴らし、メイドを呼びつける。
メイドを呼びつける時は大抵、大貴族の女性陣が関わった時である。
その意味を理解したであろうメイドは顔を青ざめさせ、己に課せられた大業にふらふらと貧血を起こしてしまった。

「か――っ!?」

ケネルが目を大きく見開き、目玉が飛び出しかねないほどの驚愕を見せる。
大口を上げ、喉の奥を晒すという痴態もなんのその。
目の前の光景を見て、驚かないものなどいるものか。

なお、私は除く。

なんか、もう、イザナギ様なら大地を砕こうが湖を永久凍土にしようが「まあ、天使様だし」で片付けられるくらい開き直ってしまった。

目の前には巨大な広間ほどもある大浴場。

王族にあてられた風呂は体を休めるには豪華すぎて本来の用途からは落第だと仰られ、水すら張っていない浴場を見てもらった。

これほど巨大な大浴場に水を張るのに3時間。湯を沸かすのには、さらに5時間。

要するに、前日あるいは朝早くから準備しなければ使用できない――特殊な場所なのである。

ここはリ・エスティーゼ王国が誇る最大の避暑地である。

高貴な方々が、羽を伸ばすために一家全員が同時に風呂に浸かることがあるのだ。

そうでなくとも、ダンスなどの社交の延長として貴族達が互いの自慢の宝石……女を連れ寄り、お披露目することもある。

ローグス王国とは、避暑地であり観光地であり、隠された大貴族の社交場でもあるのだ。

これを言うのも言わないのも、どうも口にするに憚られる。

そんなことを悩んでいる間に、天使様の悪魔の一言。

「『神の禊』ならびに『炎天大火』」

儀式も事前詠唱もなにもなしに発動したのは、水系神官魔法。第８位階魔法『ホーリー・スプリング』――神の禊。

アンデッドが蔓延る死都で休息を取るために唯一講じられた手だと伝え聞く伝説の浄化特性・回復特性を持つ『水と光』の特性を併せ持つ究極の一。

周囲一帯を聖なる領域に浄化し、水域の中心地に近ければ近いほど強力に傷を癒すという。

アンデッドであれば近くによるだけで浄化消滅。視界に入れるだけで苦痛に襲われ悶え苦しむという。

それを。準備なし無詠唱。

かるーい挨拶程度の素っ気無さで使用し、大浴場を霊験あらたかな聖水で満たしてしまった。

水面からはきらきらと球状の光が立ち上り、浄化の光で室内を輝きで満たす。

有り余る魔力はそのまま魔法にすらならず、窓から差す光を乱反射させるヴェールとして充満している。

同時に発動したのは同じく第８位階魔法。火の神官系魔法。『サン・ジ・インフェルノ』――炎天大火。

周囲一帯の自然属性を無理矢理に火山地帯レベルの炎熱に書き換える天候操作の魔法である。

発動させるだけで国はおろか、周囲一帯のエリアを不毛の大地を通り越し『砂漠』と呼ばれる再起不能の大地を生み出すとされる禁忌。

間違ってでも、風呂を沸かすためだけに使ってはならない凶悪無比。絶望の魔法である。

周囲一帯に影響を与えるような自然系の強大な魔法は、ドルイドとしての知識も必要である。

知らない者は知らない。知る者は知る。

知っているのは、かつてミスリルにまで至った冒険者である私とケネルだけ。

これに関しては完全に御伽話の領域だ。

昔、冒険者として各地を転々としている中、火山活動が活発な地帯に住まう人々から語り聞かされた知識である。

ケネルは水系神官魔法の王国屈指の使い手であり、これらの異常さを最も知ることが

できる人物。
一度切りの使用ではあるが、ケネルは第４位階の魔法行使が可能なのだ。
一度使うと１週間は再び放つことはできないし、２日間は日常系魔法すら使用困難になるほど著しい疲労を伴う。
私ですら、〝戦士が魔法を習得するのは困難〟と言われる中、ケネルに魔法の教えを仰ぎ、第１位階魔法を習得し褒め称えられたのだ。
その遥か天上の、本当にあるのかどうなのかも怪しい、けれど記録にはあるという魔法が、目の前で２つ同時に発動されたのだ。
許されることなら、「なんじゃあああああそりゃあああああああ!?」と、ありったけの想いを込めて叫びたい。
喉が掻き切れんばかりにやけくその雄叫びを上げたい。
どれだけ必死にこの気持ちを表現しようと思っても、魔法発動と同時に放出された魔力量に圧巻され、体が硬直して動かないのだ。
中腰姿勢、前に手を突き出しガタガタを震える姿を見て、第三者はどう思うのだろう。
使用人に至ってはもはや失神してしまっている。
とうとう体も事切れる。
腰が抜け、タイルが敷き詰められた床材にへたり込む。

天使様ならなんでもできそうと吹っ切れたと思っていたのはただの思い込み。
超位魔法なるものにも度肝を抜かれたが、知覚できる魔力を使った魔法は敏感にも異常性を訴えるのだ。

「だ、だだ、――っだ、第８位階魔法。神話でしか語られたことのない魔法が、今、私の目の前に……」

ケネルが必死に紡ぎ出した言葉に、イザナギ様が振り返る。
何言ってんだコイツと訝しむ視線がケネルを射抜く。

「アホみたいに魔法があるんですから、わざわざ覚えてすらいない５以下の魔法なんて普通使わないでしょう？」

そして、トドメを差した。
泡を吹き、ケネルが白目を向いて失神した。

「きゃあああ⁉　ケネルさん⁉　ケネルさーん⁉　――ってローグスさんも魂抜けて

るし！　使用人の――ってあんたらも失神してんのかよー!!」

アホみたいに魔法がある？　個人ですら発動困難な第５位階魔法が、覚えておく価値もない低級魔法？

あ、あひ。あひはは。

笑うしかないでごじゃる。